

第 2 3 回全国修学旅行研究大会 報告書

平成 18 年 11 月 11 日（土）
日本科学未来館 みらい CAN ホール

財団法人 全国修学旅行研究協会

目 次

主催者挨拶

中西 朗 財団法人全国修学旅行研究協会理事長 1P

来賓挨拶

倉見 昇一 文部科学省初等中等局児童生徒課課長補佐 2P

草野 一紀 東京都中学校長会会長 4P

全修協報告

「海外修学旅行の動向」 6P～13P

吉野 憲二 財団法人全国修学旅行研究協会調査研究部長

全修協提案

「体験学習の成果と課題」 14P～22P

久保 行正 財団法人全国修学旅行研究協会理事

実践発表

「修学旅行における海外交流活動」 23P～29P

増田 行義 岐阜大学教育学部附属中学校副校長
(資料作成：山下 俊郎教諭)

シンポジウム

30P～48P

テーマ「学校教育における修学旅行の果たす役割」

コーディネーター

高階 玲治 教育創造研究センター所長

シンポジスト

大橋 久芳 台東区立忍岡中学校長（前全日本中学校長会会長）

増田 行義 岐阜大学教育学部附属中学校副校長

高橋 正洋 近畿日本ツーリスト(株)東京第3教育旅行支店次長

杉本 敏和 財団法人全国修学旅行研究協会大阪事務局長

全国修学旅行研究大会の歩み

49P～55P

主催者挨拶

財団法人 全国修学旅行研究協会
理事長 中西 朗

ここに多くの方々のご支援により、第23回全国修学旅行研究大会が開催できる運びとなりました。昨年度に引き続き、「修学旅行における学びの創造」を主題として、教育課程編成の中で、修学旅行の位置づけを考え合えればと思います。

この会の開催にあたりまして、ご来賓として、

- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課課長補佐：倉見昇一様
- 東京都中学校長会会長：草野一紀様
- 近畿日本ツーリスト株式会社営業推進室教育旅行部長：引間安男様
- 近畿地区公立中学校修学旅行委員会会長：森永正幸様
- 東海三県修学旅行委員会副会長：桑野 修様
- 関東地区公立中学校修学旅行委員会会長：勝呂 哲様 のご臨席をいただきました。

特に、今回のシンポジウムのコーディネーターとして、教育創造研究センター所長の高階玲治様にご出馬をお願いしました。また、実践報告、シンポジストの方々のお力添えに心から御礼申し上げます。また、格段のご配慮ご面倒をいただきました日本科学未来館のご好意に深く感謝申し上げます。

今、様々な教育改革の流れの中で、早くも新しい学習指導要領の検討が始まり、学習・生活の基盤を重視した教育内容の改善が図られようとしています。その実現のためには、各学校の教育改善に関わるグランドデザインの構築が重要となり、その一環としての特別活動の在り方、そして大きな行事である修学旅行にどのように価値を設定するかが問われています。

人間が生きていく糧となるのが、多くの夢を描くことであり、たくさんの感動を享受できることです。この点からも、修学旅行は、「人間力」の育成に欠かせない大切な行事といえるでしょう。今回のセミナーは、これからの学校教育における「修学旅行の果たす役割」を再認識したいという試みです。その実践的検証として、岐阜教育大学附属中学校の実践発表をいただきます。シンポジウムでも、多くのご提言がいただけるでしょう。また、当協会の調査に基づいて、海外修学旅行の動向、修学旅行における体験学習の成果と課題について報告及び提案をいたします。

また、このセミナーの目的の一つに、各地の情報交換があります。その一環として、各地の情報パンフレットが寄せられていますので、是非、ご利用ください。

最後になりましたが、数々のご後援・ご協賛をいただきましたことに深く感謝いたしますとともに、ご多忙の中ご参加くださいました皆様へ心から御礼申し上げます。実り多い研究会になりますことを期待して、ご挨拶といたします。

文部科学省初等中等教育局児童生徒課
課長補佐 倉見昇一

第 23 回全国修学旅行研究大会がこのように多くの皆さんの参加により開催されますことを心よりお喜び申し上げます。またご参加の皆様には、今日様々な教育的課題が多い中、日頃からご尽力いただきました事をこの場を借りまして御礼申し上げます。

さて、本日私からは、修学旅行と体験学習についてお話申し上げます。近年は修学旅行に体験学習を多く取り入れている学校が増えてきております。また、修学旅行とは別に体験活動を中心とした長期の集団宿泊的行事を実施しているところもあり、さらに自治体レベルで支援しているところもあります。このような背景ですが、今の子供たちにとって体験学習・体験活動は益々意義が高くなってきています。子供たちは成長していく過程の中で、様々な人々との触れあい体験を通じて人間として必要なもの、人として大切なものを学んでいきます。それは自ら学び考え行動する創造性とか自立心、困難に立ち向かうチャレンジ精神・忍耐力、生きていく上で必要な生活の知恵であります。また責任感とか思いやりの心、義務と権利、公私のけじめ、なども身についていくと言えるでしょう。

体験学習・体験活動は色々ありますが、例えば自然体験は自然の厳しさや恩恵を知り、動植物に対する愛情をはぐくむなど、自然に対する畏敬の念を育てたり自然と調和して生きていくことの大切さを理解する貴重な機会となっています。また、自然の中での組織的活動は決まりや規律を守ることとか、友達と協力することの大切さ、自ら実践する態度等も学ぶことが出来ます。しかし私たちが享受している便利で快適で物の溢れる豊かな社会生活は、子供たちから人間として必要なもの、人として大切なものを奪った感があるのではないかと思います。例えば物が豊かになった社会のなかで何不自由なく過ごし、コンピュータゲームの普及で集団遊びが不足し、少子化による過保護の問題、そういう事もあります。こういうことが社会問題となっております。いじめ、不登校、引きこもりや、困難なことへの耐性・耐える力の欠如等の問題につながっているとも言われています。これらは早急に解決しなければいけない課題です。

子供たちの方から自発的に自然や社会に入っていくことが難しい現状を考えますと、学校や地域社会が推進していかなければならないことであり、教育行政としても積極的に支援していく必要があります。

このようなことから、平成 13 年には学校教育法の改正が行なわれまして、学校におきましては、社会奉仕体験活動や自然体験活動などの体験活動の充実に努めてきたところであります。また現在の学習指導要領におきましても、総合的学習の時間や道徳、あるいは特別活動の中で体験活動をより一層充実させる内容となっています。これらを踏まえて文部科学省としては、平成 14 年度から豊かな体験活動推進事業を実施し、各都道府県に体験活動推進校を指定して、他校のモデルとなる体験活動の推進を図っているところであります。更に平成 15 年度には都市部から農山漁村への自然が豊かな地域に出かけまして、異なる環境のもとで体験活動を行ないます地域間交流、更に翌年平成 16 年度から長期にわたる集団

宿泊等の共同生活体験活動を行なう長期宿泊体験をそれぞれ推進しているところ
であります。

このような中、学校現場としては、教育的意義が分かっていても受入れ先の選定
や指導者の問題、宿泊施設や体験学習活動に要する経費の問題等、宿泊を伴った
体験活動、修学旅行もそうかもしれませんが、色々ご苦勞があると思います。

文部科学省としてはこのような問題に如何に対処し、円滑に修学旅行や体験活
動が実施される為には如何にしたら良いか、たとえば農林水産省等とも連携して
考えていますので、ぜひ皆様方の教えやご協力もいただきたいと思っています。

最後に、本日の主催者であります財団法人全国修学旅行研究協会はじめ、関係
者の方々、また此処にお集まりの皆様のご健勝をご祈念しますと共に、修学旅行
や集団宿泊的行事あるいは体験活動を通じまして、生徒たちの豊かな人間性や社
会性が育まれますことを期待しまして挨拶とさせていただきます。

来賓挨拶 2

東京都中学校長会会長
新宿区立牛込第二中学校長 草野一紀

第 23 回の全国修学旅行研究大会の開催誠にありがとうございます。このような有意義な会議にお声を掛けていただきありがとうございます。

子供たちにとって修学旅行は極めてインパクトの強いものです。今各校では進路決定に向けての模擬面接を行っていますが、その中で「中学校生活の中で最も印象に残ったのは何ですか」という問いかけに対し、多くの生徒は「修学旅行」と答えます。私自身の経験で恐縮ですが、もう 43 年前に中学生のころ、東京から「ひので号」で車中一泊を含めて 3 泊 4 日の京都・奈良に出かけました。未だに鮮明に覚えております。その時はかなりの時間をかけて事前学習し、班ごとにテーマを決めました。私のテーマは屋根でした。各屋根の形式を調べ、どの寺院はどんな屋根なのか、また屋根の瓦はどんなものなのか、ということ細かく調べ現地で実際に見聞を広めて、最後にレポートにまとめてクラスの中で発表し、クラスの代表として全校生徒の前で発表しました。それにかなり時間をかけたことを覚えています。私にとって四十数年前の記憶が、かなり鮮明に残っているということは、多くの生徒にも修学旅行の思い出というものは非常に強いものだと考えます。従いまして修学旅行をいかにするか、どう指導していくか、どう学習させていくか、ということによってかなり教育効果は高められると思われます。私が実際に子供の頃に経験した修学旅行と今の修学旅行は大きな差はないと思います。今はほとんどの学校が、東京の場合常識になっておりますグループでの課題学習のはしりだと思います。その修学旅行をいろんな意味で学習効果を高めていく「学びの創造」という視点から捉えますと、東京の例を見ますと甚だ不十分と言わざるを得ない内容で、そもそも、修学旅行に関して改善充実をできるのはいったい誰かを考えた場合、もちろん実施されていますのは先生方ですし、いろんな事を調べてあるいは研究してより効果のある体験を中心とした修学旅行を志す多くの先生方がいらっしゃいますが、修学旅行という行事が一人二人の学校の先生によって大きく変わるかというと、これは変わりません。変わるとしたならば、学校全体としての取組みが必要なことは言うまでもありません。修学旅行を一番知っているのは誰か、校長です。課題も問題点も一番知っていて、一番数多く行っているのは校長です。ちなみに私は 20 回近くの修学旅行を経験することになります。ですが、もし修学旅行を変えたとしたら、校長中心に学校全体の取組みとして修学旅行をより良い充実したものに変えていく、それは校長でしか出来ないと思っています。本来、このような会議は多くの校長が出席すべきかと思いますが、残念ながら今日は日が悪うございました。

さて、校長が変えなければいけないと申しましたが、それがなぜ変わっていかないのか考えた時、いくつかの課題が浮かび上がって来ます。

一つはやはり教育課程の問題です。教育課程の中で修学旅行をどのように位置付けていくか、これは大きな問題です。昔はすんなりと特別活動でした。当然修学旅行の目的・意義から考えて特別活動であるかと思います。しかしながら、特別活動だけでは残念ながら、修学旅行の内容を充実させていくことが出来ないのが今の学校の現状ではないでしょうか。様々な形で学校は苦勞して、多くの学校は総合的学習の時間として位置付け、体験を増やし課題解決のカリキュラムを組んで修学旅行を実施していくというのが、東京をはじめ多くの学校で、そのように位置付けがなされているのかもしれませんが。

二つ目はいかにして安全・安心に旅を体験させるかです。

三つ目は今東京のあちこちで話題になっております、修学旅行にかかる費用の問題で、東京のあちこちの自治体で修学旅行に関わる費用の開示請求が出ております。もう一つは業者決定までの流れを示す、どこまで、どのようにして業者が決定されるのかというような資料の開示請求があちこちに出ております。市民あるいは、市民の声を代表する議員さん方の声は修学旅行の費用がかかりすぎるのではないかという声があつてのことだと思います。そうした問題も含めて、今学校は教育改革の中で、授業時数の確保・学力の向上という大きなテーマの基に全体が流れています。その中で修学旅行の時間をどのように確保をしていくかの問題も含めて、姿を変えることに積極的になる校長が東京は少ないのです。そして様々な問題をクリアして、より良い、今この会で話し合われ討議されている「学びの創造」というには残念ながらまだまだクリアしなければいけない問題も多く、校長が積極的な姿勢で修学旅行の充実を求めていくにはまだ少しギャップがあるというのが現状です。

今日は多くの先生方が全国から集まっておられます。シンポジウムもあり大変有意義な会議になると思います。

おそらくはこの3月に学習指導要領が改訂され、その中で特別活動そして総合的学習の内容についても明らかにされるのではないかと考えています。より良い充実した修学旅行、大きな心配のない、もちろん努力して課題を解決しなければならない場合もありますが、私自身が経験した昔の修学旅行のような気持ちで、おおらかに、のびのびと、新しい視点から「学びの創造」を生かせるような修学旅行の実施ができることを祈っています。

本日の会の成功とご参会の皆様のご健勝を祈念して挨拶とさせていただきます。

「海外修学旅行の動向について」

報告者 財団法人全国修学旅行研究協会
調査研究部長 吉野憲二

海外修学旅行動向の報告の前に、簡単に本財団の活動を紹介申し上げます。

おかげさまで、本財団は来年創立 50 年を迎えます。修学旅行がよりよい形で実施されるよう、「安全性の確保」「教育性の充実」「経済性の適正化」これら 3 原則の追求を理念として、活動を展開してまいりました。

重点活動として、

調査活動・この後ご報告します海外の実施状況調査等

支援活動・修学旅行団体輸送の集約業務、修学旅行の条件整備等の陳情・要請等

開発活動・環境学習プログラムの拡充(プログラムの裏面に掲載 32 コース)、環境学習セミナー・海外修学旅行安全セミナーの開催等

研究活動・本日開催いたしております研究大会、各地域委員会との研究発表会、個別の課題研究等

この様に、常に新しい時代に対応し学校現場と連携しながら、公益法人としての役割を果たしてまいりました。

さて、海外修学旅行の動向について、概要をご報告いたします。

資料として後ろに、「平成 17 年度全国公立高等学校の海外修学旅行の実施状況」を簡単にまとめたものを綴っております。(10～13 ページ)

海外修学旅行は、昭和 47 年(1972) 私立近江兄弟社高校が実施した韓国修学旅行が最初の海外修学旅行かと思います。その後、昭和 50 年代韓国・台湾・中国を目的地にした修学旅行が増えてきましたが、実施の多くは私立学校でした。

公立では昭和 59 年(1984) 福岡県の県立小倉商業高校が初めての韓国修学旅行をおこなっています。昭和 62 年(1987) 埼玉県のパオ市立パオ高校が中国への修学旅行を行ないました。以後、公立高校の海外修学旅行を認める教育委員会が急増し、現在に至っています。20 数余年の歴史を経てきて、海外修学旅行は円熟期を迎えたといつてよいかと思います。

現在、海外修学旅行の実施を認めていないのは埼玉県のみとなっています。

資料の 10 ページの通り、17 年度は 851 校 14 万 2 千名の生徒が海外へ出発し、訪問国は 29 カ国・地域にのぼります。

<全体の動向>

○実施校数・旅行件数、参加生徒数は前年より増加。公私立の比率は 48：52 でやや

私立が多いが、ほぼ同率に近いとみてもいいと思います。公立の増加が顕著。

○訪問国は、韓国・オセアニア・北米・東南アジアは増加、中国・ヨーロッパは減少傾向です。

○中国の反日デモの影響で中国への渡航を中止した学校もある。熊本県ではこの中国反日デモの影響で実施をとりやめ、公立では海外実施校が0の唯一の県となっています。

<都道府県別の動向> 県別状況は7ページを参照

○茨城県は17年度から認めることになったが、実施計画等の準備から今年度の実施はありませんでした。

○実施校は、関東・近畿・中四国地方は増加、九州は減少。

・実施校は、24府県が増加、17道県で減少

・増加が顕著な県は、神奈川(16校、公立9、私立7)、愛媛(15校、公立12、私立3)、山口(6校、私立6)、広島(5校、公立2、私立3)

○出発地別旅行先は、42都道府県が韓国、41都道府県がオーストラリア、35都道府県がハワイを目的地としています。

シンガポール・マレーシアも30～34都道府県と多い。

ハワイ 21校増(対前年124%)、サイパン 13校増(165%)、グアム 4校増(136%)が38校増(132%)と大きく伸びています。

全国高等学校の概要

○学校数は5,418校(本校5,304校、分校114校)で、前年度より11校減少している。

・公立の学校数は4,082校で、前年度より11校減少している。

・私立の学校数は1,321校で、前年度と同数となっている。

○生徒数は360万5千人で前年度より11万4千人減少している。

・修学旅行対象学年(全日制2年・定時制3,4年・専科)の生徒数は、122万2千人で前年度より2万4千人減少している。

・公立の生徒数は1万9千人の減少、私立は4千人の減少となっている。

(資料：文部科学省学校基本調査)

2. 公私立別の状況 …… 11ページ

(1) 公立学校

・410校6万4千人が参加、旅行実施件数は425件でした。

・実施率からみると、鳥取44%、宮崎34%、愛媛29.5%、兵庫24%、大分23.6%、大阪21.4%と西日本地方が高い。

・旅行先は、韓国28.7%、東南アジア22.4%と近隣諸国が多く過半数を占める。次いで北米(ハワイ・グアム等含む)19.3%、オセアニア16.9%となっています。また、ハワイ・グアム・サイパンの伸びが顕著。

(2) 私立学校

- ・ 441 校 7 万 8 千人が参加、旅行実施件数は 644 件であった。
- ・ 実施率は、75%の滋賀・山口、60%台の山梨・岡山・宮崎、30%～50%台は 20 道府県を数え、公立と比して 3 倍強となっています。
- ・ 旅行先は、オセアニア 29%、北米(ハワイ・グアム等含む)25%が多く、ヨーロッパ・韓国・東南アジアがほぼ 12%台となっています。

私立高校と比べ実施件数はそう多くはないですが、公立でも学科・コース別、国内との選択による実施例も見受けられます。英語科・英語コース、国際教養科・国際流通科、グローバルコミュニケーションコース等等です。

これらは新しいタイプの高校の設置・生徒の能力、適性、興味・関心が多様なものとなり、様々なニーズに対応した特色ある学校づくり。その中で、総合学科、単位制高校、中高一貫教育と近年の新しいタイプとしてあげられます。また、多種類の学科、コース、学系を設置しています。

ご承知のとおり、2001 年 9 月の米国同時多発テロ事件、その後のイラクをめぐる国際紛争、SARS の発生やテロ事件等にみられるように、海外修学旅行を取り巻く社会・国際環境の変化は実施にも当然大きな影響を与えています。

また、原油高騰による航空燃料費の利用者負担、燃油特別付加運賃の導入による費用負担増(キャリア・方面により異なるが日本の航空会社では中国 4800 円、韓国 2000 円、東南アジア 1 万円)の問題もあります。

2001 年 9 月の米国同時多発テロ事件以前、17~18 万人前後の修学旅行が実施され、右肩上がりと推測されましたが、近年、公立高校での実施は大体 10%前後の実施率で推移しています。

13 ページに……参考までに中学校における海外修学旅行の状況を掲げています。

公私立中学校で、126 校 1 万 2 百人の実施が行なわれています。比率からみると

8:2 と圧倒的に私立中学校が多いが、公立中学校でも、11 県 26 校(2431 人)が実施しています。

○公立学校

- ・ 旅行先は韓国(17 校 1976 人)、シンガポール・マレーシア(4 校 301 人)、オーストラリア(3 校 106 人)、タイ(1 校 19 人)、ニュージーランド(1 校 19 人)
- ・ 出発地は九州が 3 県、四国 2 県、近畿 2 県、中部 2 県、関東・東北各 1 県にまたがるが、福岡県(市)が 12 校 1,670 人と多く、校数比で 42%、人数比では 69%を占めています。旅行先は韓国です。
- ・ 旅行費用は、韓国が 5~6 万円台、シンガポール・マレーシア 9 万円台。オーストラリア 20 万円台は自治体負担が大きい

○ 私立学校は、31 都道府県 100 校が実施、参加生徒数は 7800 人

- ・旅行先はオーストラリア(31校 2081人)、北米(29校 2213人、ハワイ含む)、ニュージーランド(14校 1686人)が多い

データの的には以上の通りですが、修学旅行は明確な目的をもち、多くの調査、事前学習をし、大変なエネルギーを使って準備される学校行事です。

振り返ってみるという行為は人間だけが持っている思考活動といえます。国内・海外とわず、長い時間をかけて取組んだ修学旅行を、個として、あるいは集団として振り返ってみるとき、そこには様々な思いや感慨が生まれると思います。躓きや失敗、葛藤、失意もあったのではないのでしょうか。それを乗り越えたからこそ、よかった、やりとげた、みんなの力って素晴らしいという連帯感、また訪れたいという思い・期待感がひしひしと生徒一人一人の心の中に染みとおって行くのではないのでしょうか。

修学旅行で学ぶ、この主体的な学びの心を決して一過性のものにしてしまっちゃはいけません。人間は生涯を自ら学びつづける、旅をしつづける存在です。修学旅行を旅の原体験として位置付けることが出来るのならば、その地位をもっともっと高めねばなりません。

修学旅行で学び、そして身につけた力はまさに生きて働くという学力というにふさわしい力ではないかと思います。この力の蓄積がやがて人間をそして自然や文化を温かく見つめ、社会、日本ひいては世界を鋭く洞察する心を育み、自らの問題として生まれることを強く期待したいと思います。

なお、18年度については、5月時点での調査では公立高校に限りませんが 453校・6万8千名の実施が計画・予定されている模様です。

最後になりましたが、毎年この調査にご協力ご指導をいただいております全国都道府県教育委員会、全国私立学校所管部署の皆さまに厚く御礼申し上げます。

また、当調査の報告書は来月12月中には発行し、報告させていただく予定です。

資料

平成 17 年度全国公私立高等学校海外修学旅行の概要(要旨)

財団法人全国修学旅行研究協会
調 査 研 究 部
部 長 吉 野 憲 二

－ 概要のポイント －

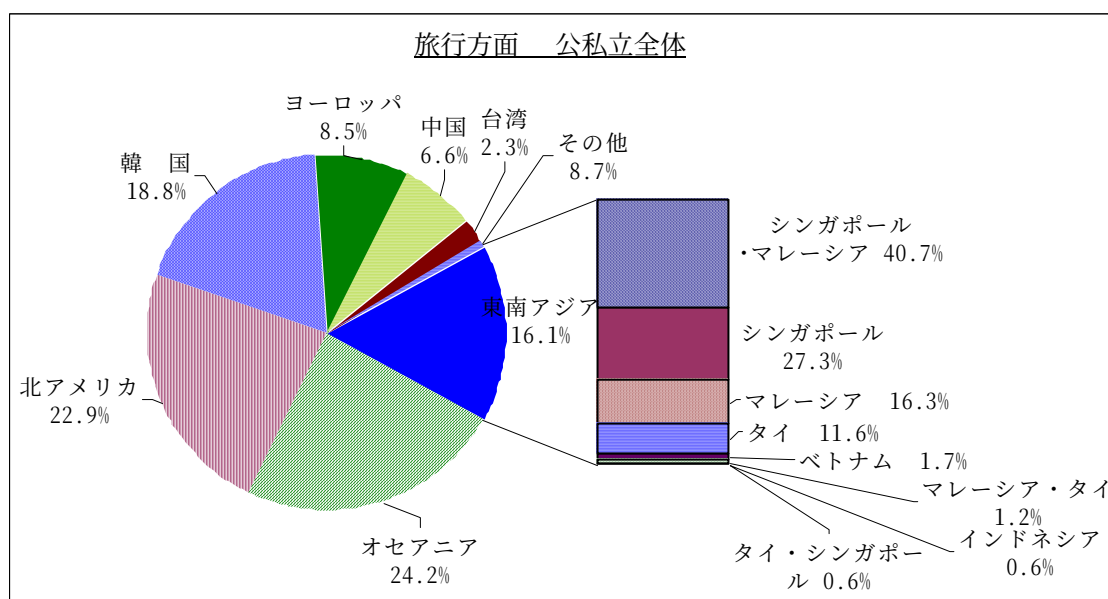
<全体の動向>

- 実施校数・旅行件数、参加生徒数は前年より増加、公立の増加が顕著。
- 訪問国は、韓国・オセアニア・北米・東南アジアは増加、中国・ヨーロッパは減少。
- 中国の反日デモの影響で中国への渡航を中止した学校もある。

<都道府県別の動向>

- 茨城県は 17 年度から認めることになったが、実施計画等の準備から今年度の実施はない。
実質、栃木県・埼玉県が認めていない。
- 実施校は、関東・近畿・中四国地方は増加、九州は減少。
 - ・実施校は、24 府県が増加、17 道県で減少
 - ・増加が顕著な県は、神奈川、愛媛、山口、広島
- 出発地別旅行先は、42 都道府県が韓国、41 都道府県がオーストラリア、35 都道府県ハワイ。
シンガポール・マレーシアも 30～34 都道府県と多い。

	実施校数（件数）			参加数（人）		
	合計	公立	私立	合計	公立	私立
平成 14 年	874 (1025)	487 (505)	387 (520)	165,255	79,045	86,210
15 年	400 (481)	150 (150)	250 (331)	64,412	21,577	42,835
16 年	765 (975)	354 (367)	411 (608)	133,523	54,397	79,126
17 年	851 (1069)	410 (425)	441 (644)	141,997	63,908	78,089



1. 全国高等学校の概要

○学校数は 5,418 校（本校 5,304 校、分校 114 校）で、前年度より 11 校減少している。

- ・公立の学校数は 4,082 校で、前年度より 11 校減少している。
- ・私立の学校数は 1,321 校で、前年度と同数となっている。

○生徒数は 360 万 5 千人で前年度より 11 万 4 千人減少している。

- ・修学旅行対象学年(全日制 2 年・定時制 3,4 年・専科)の生徒数は、122 万 2 千人で前年度より 2 万 4 千人減少している。
- ・公立の生徒数は 1 万 9 千人の減少、私立は 4 千人の減少となっている。

(資料：文部科学省学校基本調査)

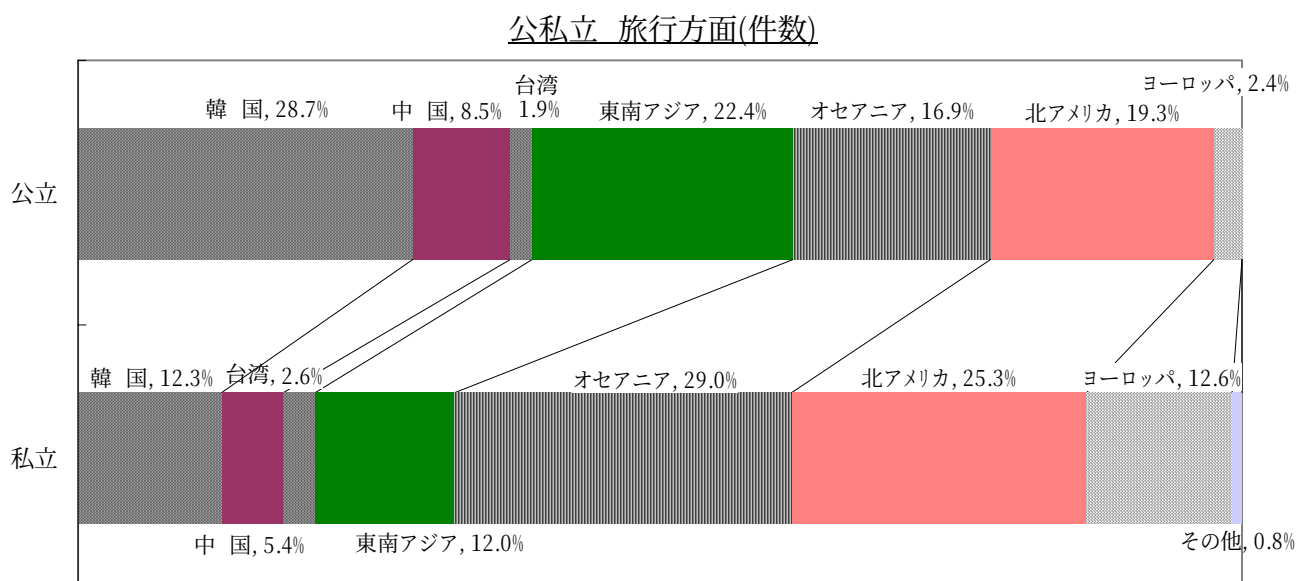
2. 公私立別の状況

(1) 公立学校

- ・410 校 6 万 4 千人が参加、旅行実施件数は 425 件であった。
- ・実施率からみると、鳥取 44%、宮崎 34%、愛媛 29.5%、兵庫 24%、大分 23.6%、大阪 21.4% と西日本地方が高い。
- ・旅行先は、韓国 28.7%、東南アジア 22.4% と近隣諸国が多く過半数を占める。次いで北米(ハワイ・グアム等含む)19.3%、オセアニア 16.9%となっている。また、ハワイ・グアム・サイパンの伸びが顕著。

(2) 私立学校

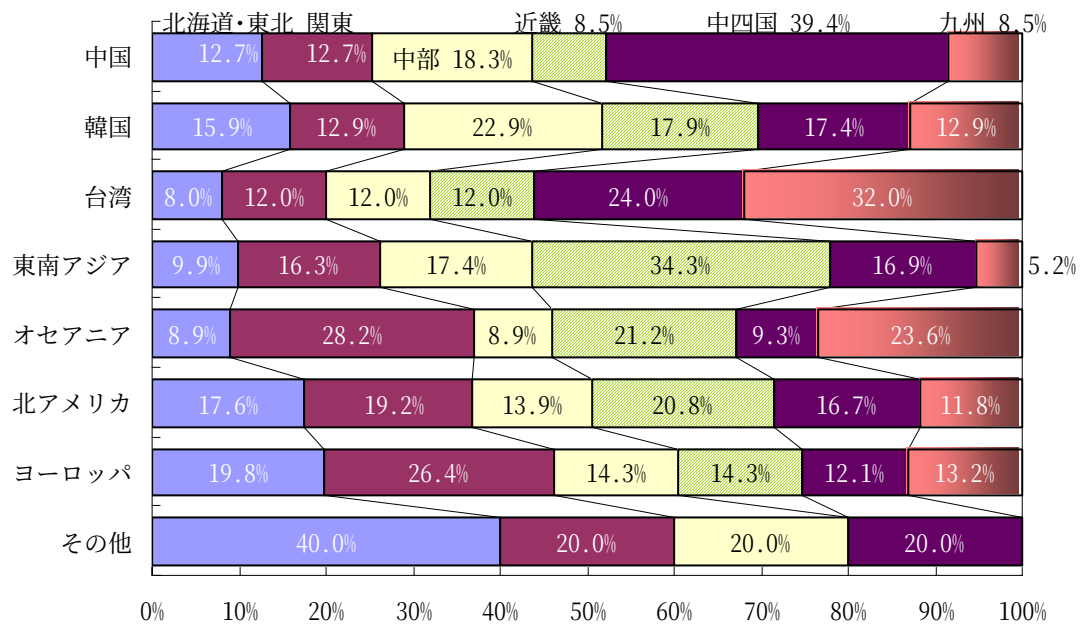
- ・441 校 7 万 8 千人が参加、旅行実施件数は 644 件であった。
- ・実施率は、75%の滋賀・山口、60%台の山梨・岡山・宮崎、30%～50%台は 20 道府県を数え、公立と比して 3 倍強となっている。
- ・旅行先は、オセアニア 29%、北米(ハワイ・グアム等含む)25%が多く、ヨーロッパ・韓国・東南アジアがほぼ 12%台となっている。



2. 全国の実施状況

地方	都道府県	公立高等学校						私立高等学校						合 計		
		対象		実施状況				対象		実施状況						
		校数	生徒数	校数	件数	生徒数	実施率	校数	生徒数	校数	件数	生徒数	実施率	校数	件数	生徒数
北海道・東北	北海道	280	42,563	8	9	1,647	2.9	54	11,951	24	49	3,891	44.4	32	58	5,538
	青森	74	11,839	10	11	719	13.5	17	3,834	5	6	363	29.4	15	17	1,082
	岩手	80	12,387	2	2	180	2.5	13	2,467	7	10	836	53.8	9	12	1,016
	宮城	91	18,132	10	10	899	11.0	19	6,176	5	13	996	26.3	15	23	1,895
	秋田	59	10,350	3	3	180	5.1	5	1,243	2	2	138	40.0	5	5	318
	山形	53	9,610	7	7	627	13.2	15	4,031	8	11	2,320	53.3	15	18	2,947
	福島	96	19,129	2	2	438	2.1	19	4,357	9	11	1,525	47.4	11	13	1,963
	小計	733	124,010	42	44	4,690	5.7	142	34,059	60	102	10,069	42.3	102	146	14,759
関東	茨城	113	22,723	-	-	-	-	22	7,388	11	13	4,254	50.0	11	13	4,254
	栃木	72	15,119	-	-	-	-	14	6,622	5	8	1,307	35.7	5	8	1,307
	群馬	77	15,020	7	7	1,206	9.1	13	4,637	4	8	742	30.8	11	15	1,948
	埼玉	160	42,205	2	2	714	1.3	47	18,014	24	30	9,017	51.1	26	32	9,731
	千葉	146	35,855	4	4	888	2.7	54	16,394	15	16	3,649	27.8	19	20	4,537
	東京	204	46,822	3	3	645	1.5	238	59,970	40	54	5,967	16.8	43	57	6,612
	神奈川	168	43,353	24	24	4,309	14.3	78	23,970	16	25	2,832	20.5	40	49	7,141
	山梨	36	7,619	1	1	73	2.8	11	1,958	7	8	746	63.6	8	9	819
新潟	108	20,674	2	2	104	1.9	15	4,394	6	6	1290	40.0	8	8	1,394	
小計	1084	249,390	43	43	7,939	4.0	492	143,347	128	168	29,804	26.0	171	211	37,743	
中部	長野	91	18,370	1	1	42	1.1	16	3,484	7	8	993	43.8	8	9	1,035
	富山	48	8,531	8	10	504	16.7	9	2,148	4	6	364	44.4	12	16	868
	石川	54	9,012	8	8	1,460	14.8	10	2,843	2	3	170	20.0	10	11	1,630
	福井	32	6,709	3	3	600	9.4	7	2,081	1	1	14	14.3	4	4	614
	岐阜	69	16,550	5	5	1,015	7.2	16	4,411	6	8	989	37.5	11	13	2,004
	静岡	106	25,754	21	22	2,217	19.8	42	12,033	17	28	3,565	40.5	38	50	5,782
	愛知	175	44,900	9	9	1022	5.1	56	20,761	25	35	3,400	44.6	34	44	4,422
	三重	68	14,991	8	8	692	11.8	14	3,963	4	8	865	28.6	12	16	1,557
小計	643	144,817	63	66	7,552	9.8	170	51,724	66	97	10,360	38.8	129	163	17,912	
近畿	滋賀	50	11,921	5	5	1154	10.0	8	1,943	6	10	1,217	75.0	11	15	2,371
	京都	64	15,428	11	12	1055	17.2	41	10,187	15	20	2,941	36.6	26	32	3,996
	大阪	192	48,004	41	41	9,849	21.4	94	28,225	40	59	7,953	42.6	81	100	17,802
	兵庫	172	39,423	42	43	8,633	24.4	52	13,009	14	16	2,118	26.9	56	59	10,751
	奈良	57	10,067	3	3	783	5.3	15	3,578	5	6	919	33.3	8	9	1,702
	和歌山	46	9,565	5	5	379	10.9	8	1,770	2	3	493	25.0	7	8	872
小計	581	134,408	107	109	21,853	18.4	218	58,712	82	114	15,641	37.6	189	223	37,494	
中国・四国	鳥取	25	5,255	11	12	2,213	44.0	6	1,294	1	1	299	16.7	12	13	2,512
	島根	41	6,479	8	8	391	19.5	10	1,337	2	2	259	20.0	10	10	650
	岡山	85	14,327	7	7	647	8.2	23	5,804	14	26	1266	60.9	21	33	1913
	広島	102	18,884	15	17	1,947	14.7	36	8,442	13	26	1,499	36.1	28	43	3,446
	山口	72	10,180	8	8	613	11.1	20	3,697	15	18	1,147	75.0	23	26	1,760
	徳島	43	7,945	7	7	1,667	16.3	4	333	1	1	21	-	8	8	1,688
	香川	35	7,734	6	6	934	17.1	10	2,117	2	3	158	20.0	8	9	1,092
	愛媛	61	11,863	18	20	1257	29.5	12	3,112	5	6	256	41.7	23	26	1,513
	高知	42	6,097	3	4	169	7.1	9	1,972	2	3	216	22.2	5	7	385
	小計	506	88,764	83	89	9,838	16.4	130	28,108	55	86	5,121	42.3	138	175	14,959
九州	福岡	120	30,249	10	10	2,482	8.3	61	19,184	12	22	2,578	19.7	22	32	5,060
	佐賀	39	7,827	6	6	769	15.4	8	2,268	2	2	351	25.0	8	8	1,120
	長崎	68	12,267	7	7	1,311	10.3	21	4,878	6	8	1,083	28.6	13	15	2,394
	熊本	63	13,568	0	0	0	-	22	6,347	9	13	898	40.9	9	13	898
	大分	55	9,681	13	13	3,332	23.6	14	3,232	5	10	654	35.7	18	23	3,986
	宮崎	44	9,299	15	15	1,239	34.1	15	4,175	9	13	971	60.0	24	28	2,210
	鹿児島	84	14,757	11	13	1,987	13.1	23	6,062	6	8	540	26.1	17	21	2,527
	沖縄	62	17,006	10	10	916	16.1	5	906	1	1	19	20.0	11	11	935
小計	535	114,654	72	74	12,036	13.5	169	47,052	50	77	7,094	29.6	122	151	19,130	
合計	4,082	856,043	410	425	63,908	10.0	1,321	363,002	441	644	78,089	33.4	851	1,069	141,997	

旅行先別出発地方(件数比)



4. 中学校における海外修学旅行の状況(参考)

○公立学校は、11 県 26 校が実施、参加生徒数は 2431 人

- ・旅行先は韓国(17 校 1976 人)、シンガポール・マレーシア(4 校 301 人)、オーストラリア(3 校 106 人)、タイ(1 校 19 人)、ニュージーランド(1 校 19 人)
- ・出発地は九州が 3 県、四国 2 県、近畿 2 県、中部 2 県、関東・東北各 1 県
- ・旅行費用は、韓国が 5～6 万円台、シンガポール・マレーシア 9 万円台。オーストラリア 20 万円台は自治体負担が大きい

○私立学校は、31 都道府県 100 校が実施、参加生徒数は 7800 人

- ・旅行先はオーストラリア(31 校 2081 人)、北米(29 校 2213 人、ハワイ含む)、ニュージーランド(14 校 1686 人)が多い

5. その他

全修協提案

財団法人全国修学旅行研究協会
理事 久保行正

皆さん、こんにちは。全修協の久保と申します。15分間という短時間ですが、述べさせていただきます。

全修協では、毎年修学旅行の課題となるところを、全国国公立中学校の3分の1の約3600校にアンケート調査をしています。

今年度は、修学旅行における体験学習をテーマに取り上げました。修学旅行に体験学習を取入れている学校が年々増加しており、今は80%になっております。これらの学校の体験学習のねらいや実践に学び、今後の体験学習のあり方を考えたいと思いこのアンケートを実施しました。まだ、中間集計の段階ですが、調査結果は2月頃集計・考察処理して当協会のホームページ等で、発表したいと思っております。

調査項目は、資料の18ページにあります問1から7までです。ご覧下さい。調査結果は、19ページから20ページ、資料として22ページまであります。あとで、ご覧いただければありがたいと思います。

18ページをご覧下さい。

このアンケート結果を参考に、

1. 体験学習に期待するもの
2. 体験学習で課題となること
3. 今後の体験学習の方向性を集約し、提言をさせていただきたいと思

います。

アンケートをまとめておりますと、どの学校も修学旅行に、「生徒の人間形成」や「生きる力の育成」に焦点を当てているように感じます。

体験学習に期待するものを大きく5つに分類することができました。

1つ目は、未知のものとの出会いと感動です。

学校や家庭生活で、日常出会うことの無い未知のものとの出会いや体験は、新しい発見と感動を与えます。また、授業で学んだことを自分の目で見たり、直接触れてみることで、既習学習の確認ができ、学習の定着が図れます。また知る喜び、確認できた喜びを味わうことができます。体験活動は、五感への刺激があり、ものの見方や考え方を柔軟にしてくれます。

2つめは、**生徒の主体性と成就感**です。

修学旅行の目的、体験学習の目的が明確であることです。生徒も学習のねらいが明確になり、事前の活動から計画的、主体的な取り組みができます。自分の学習のねらいにそって体験し、確認できたときの感動、成成感は大きな意義があります。

3つめは、**人とのかかわり**です。

学校を離れ、未知の地で、未知の人とのふれあいは生徒にとっても、日常に無い緊張感を味わいます。特に、**その道を極めた人とのふれあひ**は、貴重な人生経験にもなります。

土地の人々との交流から、未知の文化、伝統を学び、吸収し、大きな感動と成成感をもたらします。また、他人に対する礼儀作法やマナー等、将来に生きるための必要な学習になります。

4つめは、**思い出作り**です。

感受性豊かな中学生時代のこのような体験は、友だちと過した中学校生活を豊かにし、一生の思い出になります。

5つ目は、**活動の継続性**です。

質の高い伝統文化や自然に触れたり、体験することは、生徒に感動という大きなインパクトを与えます。その感動ある体験を修学旅行中の一時のものに終わらせず、事前、当日の体験、事後へ活動を継続させることです。

次に**体験学習の課題として提示されたこと**について、申し上げます。

たくさんの期待するものに対して、計画の段階の課題、指導中の課題、指導のための時間設定等、様々な課題があげられています。

その1つは、**ねらいに関すること**です。

学校の修学旅行における体験学習を取入れる**ねらいが明確でない場合**があります。ねらいが明確でない場合は、全体行動での体験であれ、班や個人による体験活動にしても何を体得させたいのかがはっきりしないし、個々の生徒も無目的で遊び半分の体験になってしまうケースが多くなっているようです。

(P19 の) アンケート問1で、体験学習を**今後とも取入れない**と答えた学校が約9.4%ありますが、その理由に、修学旅行での体験学習が遊興的であったり、観光化されているので修学旅行で取入れる必要性が感じられないと言い切っている学校もあります。

2つめは、修学旅行という限られた時間の中で、十分な体験活動の**時間の確保**ができない、また、**費用対効果**といたしますか、費用の割に教育効果が認められない。といったものです。

3つめは、**体験先の選定に関する**ことです。体験受入先の情報が不十分で、学校や生徒が求めている体験受入先の選定が難しいことです。また、事前指導担当教員の理解不足、体験先との連携不足があげられています。

4つ目は、**事前準備に関する**ことです。事前指導―体験学習―事後指導と一貫したねらいのもと、共通理解を持って継続した学習体系が必要ですが、事前準備・指導の時間がなかなか取れない。体験学習を充実させようとすればするほど、時間が足りないのが現状のようです。

5つめは、**事後指導に関する**ことです。問5にあるように個人新聞、班の壁新聞や反省会や報告会など多彩な事後のまとめと評価を行なっていますが、事前学習と同じように、時間が足りないのが実情です。今後の学習や生活につながる事後指導は十分とはいえない状況です。

以上「体験学習に期待するもの」と「体験学習の課題となること」を申し上げます。体験学習に関する意見は、21,22 ページに資料として載せてありますので、あとでご覧下さい。

最後に、「今後の体験学習の方向性」について、提言いたします。

学校は、修学旅行に何を求めているのでしょうか。

日頃の環境と違う未知の地で、未知の人との出会い、関わり合い、初めての文化遺産や自然などを見聞・体験し、驚きや感動、新しい発見を友だちや先生と共有することは、彼らのこれからの「生きる力」を育て、「人間形成」をもたらすものと思います。

そのための提言の1番目は、**教育目標**と**目的意識**に関することです。

学校教育目標に沿った修学旅行のねらいを定め、目的意識をしっかり持った意識の高い修学旅行に取組ませることです。

2つめは、明確にしたねらいに沿った体験学習の**情報収集・選定と事前指導**です。正確な情報収集は、ねらいに沿った体験を選ぶ上で、大変重要です。教師が体験学習の内容を十分理解し、生徒に助言できることも大切なことです。

情報収集は、どの学校も大変苦勞しているようですが、その土地に明るい旅

行会社や資料、インターネット等を十分に活用したいものです。

適切な情報収集と体験場所との直接の連絡（連携）によって、有効な事前指導が可能になります。

こうした活動が、生徒の主体性、協力性、礼儀作法などを育成し、人間性を向上させ、3つめの当日の指導と安全管理に繋がります。

特に班行動による体験学習は、礼儀やマナーの指導と共に交通や体験先での安全指導が、教師の目が届かない所だけに重要になってきます。安全指導は、日常生活、事前、当日の指導と一貫していなければ、効果的ではありません。

生徒への指導と共に、安心できる体験先と旅行会社の選択、連携も安全管理上、重要なポイントです。

（4つ目）

修学旅行で体験し、学んだことは、事後指導でその成果を確認し、評価し、今後の学校生活やこれからの人生に生かされなければなりません。

全体評価・個人評価の方法、総合的な学習の時間との連携に対する評価の方法なども急ぎ、研究しなければならないことと考えます。

（まとめとして）

修学旅行は見聞中心であっても十分な準備や取組みによって、未知の土地、未知の人との出会い、新しい発見等による感動や驚きなどが得られます。これは、十分に教育的価値があり貴重な体験になっています。

それでも活動的な体験学習を取入れるということは、見聞だけの時よりインパクトがあって、生徒の関心を高め、主体性を増し、更に意欲的に「人間形成」や「生きる力」の育成を目指すという意味があります。体験学習が物見遊山であったり、小手先の体験では、意味の無い物になってしまいます。

1年生からの指導の積上げを基に、3年間の集大成が修学旅行です。しっかりと企画から事前指導、当日の活動、事後指導や評価をする。そして、生徒の主体的な活動である体験学習は、彼らの人間形成に役立ち、将来へと繋がる学習であると思います。

以上で、体験学習の成果と課題についての提案を、終わらせて頂きます。

資 料

アンケート調査 修学旅行における体験学習について (全国調査活動・中間まとめより)

全国修学旅行研究協会

1 調査のねらい

学校では新しい教育課程の下で、これまで以上に創意工夫に満ちた特色ある教育活動が展開されている。特色ある教育活動では、学習の場や、指導者の幅を広げ、学校外での体験活動や地域の人材を活用した授業を展開し、地域社会の教育力の活用が図られている。

この状況の中、修学旅行で体験学習を取り入れている学校が年々増加し、80%以上になっている。この各学校の体験学習のねらいや実践に学び、今後の体験学習のあり方を考察したい。

2 調査対象と結果発表

このアンケートは、約3,600校の全国国公立中学校に依頼した。2月頃集計・考察処理をし、当協会ホームページ、また協力していただいた学校には、メール等で返送。アドレスは (<http://shugakuryoko.com>)

・調査依頼予定校(国公立中学校)	3,563校	
・10月末現在処理校数	1,401校	(中間集計)

3 調査項目

問1 平成18年度の修学旅行に体験学習を取り入れましたか。(3択)

問2 そのとき、あなたの学校では、その教育的意義をどのように設定されていますか。(3つ以内選択)

問3 体験学習における事前指導(準備)をどのようにされましたか。(しますか)(3つ以内選択)

問4 体験学習実施にあたって、特に留意したことは、何ですか。(したいことは)(各3つ以内選択)
(1) 学習支援 (2) 安全対策

問5 事後指導は、どのようにされましたか。(されますか)(3つ以内選択)

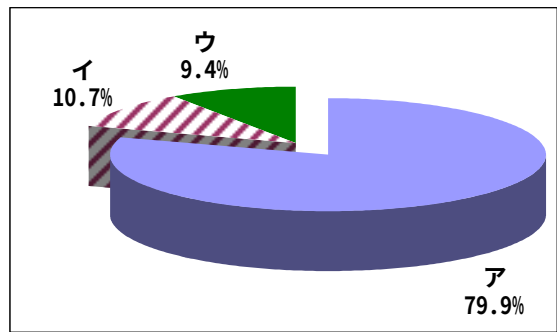
問6 今後の課題は何ですか。(3つ以内選択)

問7 全体を通して体験学習に関するご意見をお聞かせください。(自由記述)

4 調査結果

問1 平成18年度の修学旅行に体験学習を取入れましたか。

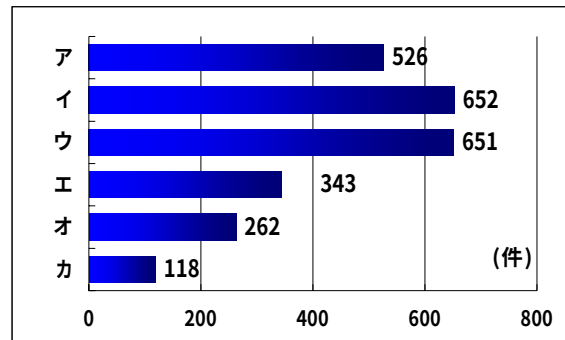
- ア 取入れた
イ 今後取入れたい
ウ 今後とも取入れない



問2 そのとき、あなたの学校では、その教育的意義をどのように設定されていますか。(3つ以内選択)

- ア 学習への関心・意欲をたかめる
イ 学習の満足感や授受感を体得させる
ウ 一人一人に主体的・追究的な活動をさせる
エ 自ら課題を見出し解決する能力を養う
オ 知識を統合し、生きて働く知恵を獲得させる
カ 自らの考えを積極的に表現させる
キ その他

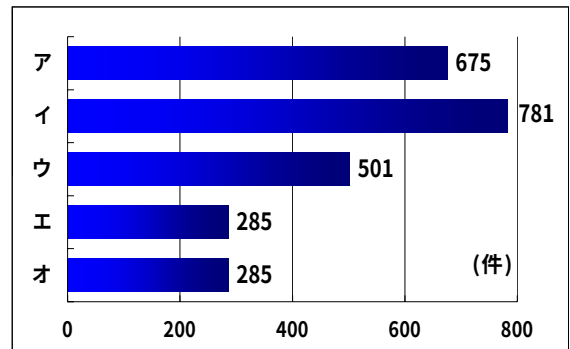
- ・学校では学べない体験や社会交流をする
- ・日本の伝統文化に触れる
- ・人との触れ合いを通して豊かな感性を育てる
- ・普段の生活では体験できないこと、自分の目で見えてくることなどを通して自分の考えを広げる
- ・伝統産業に関わる方との交流を通して、あらためて自分の生き方について考える機会とする
- ・グループ行動の充実
- ・知識の幅を広げる
- ・よき思い出をつくる



問3 体験学習における事前指導(準備)をどのようにされましたか(しますか)(3つ以内選択)

- ア ねらいを明確にし、ねらいに応じた体験の質の向上を図る
イ 体験場所・内容の事前調査を行う
ウ 活動の展開に必要な資料を十分用意する
エ 修学旅行中の体験と日常の学校生活との継続性を図る
オ 実りある体験活動にするため教師の指導・助言を充実させる
カ その他

- ・調べ学習を充実させる
- ・集団行動、服装、マナーを充実する機会とした
- ・生徒の実行委員会が積極的に取り組んだ
- ・美術科の授業の一環として位置づけ指導した
- ・体験先指導者との人間的な交流

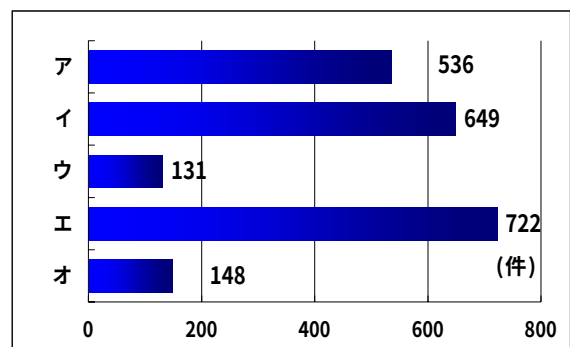


問4 体験学習にあたって、特に留意したことは、なんですか(したいことは)(各3つ以内選択)

(1) 学習支援

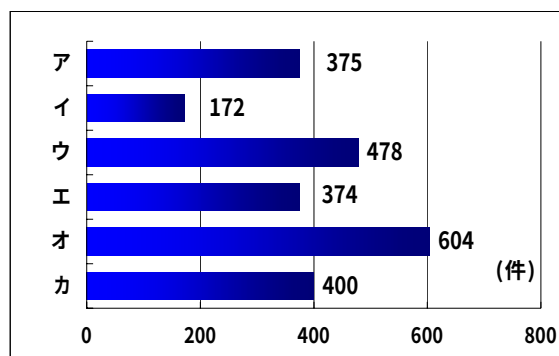
- ア 学習手段の確認
イ 集団・個人相互の協力体制
ウ 意欲を示さない生徒の指導
エ 体験活動中の礼儀・作法
オ 教師のきめ細かな巡回指導
カ その他(主な物・抽出)

- ・事前の調査、練習、準備
- ・目標、ねらい、テーマの明確化
- ・活動時間・内容の統一化
- ・教師引率、巡回
- ・商業ベースではないものにした
- ・座禅を行うにあたって、信教の自由や思想・信条の自由に配慮



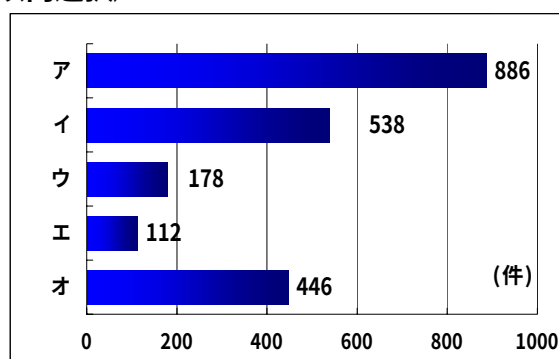
(2) 安全対策

- ア 管理マニュアルの策定
- イ 電話連絡網の作成
- ウ 携帯電話の活用
- エ 体験中のケガ・病気
- オ 安心できる業者の選択
- カ 傷害保険への加入
- キ その他（主な物・抽出）
 - ・体験場所についての事前の情報収集
 - ・危険箇所を下見によって確認
 - ・ルールを守って活動できる生徒指導の徹底
 - ・貸切ハイヤーの利用 運転手との連絡体制
 - ・シルバーガイドの活用
 - ・他校とのトラブルを防ぐ細かな連絡体制
 - ・発信機着用



問5 事後指導は、どのようにされましたか(されますか) (3つ以内選択)

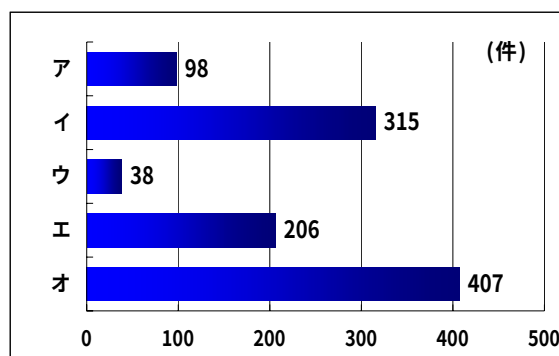
- ア 体験した内容をまとめる
- イ 発表する機会をつくる
- ウ 集録を作成する
- エ 個々の評価カード等を作成する
- オ 今後の生活や学習指導に生かす
- カ その他
 - ・総合的な学習との連携
 - ・作品の評価
 - ・体験学習先へのお礼状
 - ・体験先への提案、体験先からの評価



アンケートでは、①文書にまとめる（報告書、文集、個人新聞、班による壁新聞等）
 ②発表会（学年集会、全校集会、保護者会、地域の方々への発表会等）
 ③反省会（班、学級会、学年集会等）
 ④礼状（体験学習先、お世話になったの方々へ） 等の事後指導があげられている

問6 今後の課題は何ですか (3つ以内選択)

- ア ねらいが十分達成できなかった
- イ 事前指導が不足
- ウ 安全対策が不十分
- エ 時間・経費の割に内容が不十分
- オ 個々への評価が不十分



問7 全体を通して体験学習に関するご意見をお聞かせください (自由記述の抜粋・()内の数は同意見数)

以下の(1)～(5)に分類し、更に各々を①～のキーワードで仕分けし、記述はまとめたり、大幅に抜粋

回答は別紙に掲載

別 紙

体験学習に関する意見

(1) 意義・ねらいに関して

- ①一貫性(20) ・生徒の発達段階、興味関心、学校教育目標との関連、3年間の計画性。
- ②ねらい(54) ・学校の場にはない実社会の場での体験、日頃できない体験。
- ③意義 (17) ・日ごろ体験学習不足の生徒に、見学だけでなく体験させることに意義。
- ④地域性(3) ・旅行先の地域性・文化性など、その地域ならではの体験学習。
- ⑤人間性(12) ・「生きる力」の育成につながる体験学習。今まで身につけてきた力を試す場、人間形成。
・体験学習中の表情に輝きがみられた。これからの学校生活に意欲化。
- ⑥意欲性(4) ・学習の関心意欲を高める。
- ⑦社会性(17) ・学年、学級、班などの団結、絆を深め社会性を高める。
・他人とのかかわりから社会生活に必要な礼儀・マナーを学ばせる。
- ⑧主体性(43) ・学ぶことの関心意欲を高め、主体性を育てる。
- ⑨歴史文化(23) ・日本の誇る歴史や文化遺産の中での伝統文化体験に意義がある。
- ⑩ふれあい(13) ・日頃できない「人」とのふれあい、人とのかかわり。
- ⑪個性伸長(6) ・豊かな体験が個性を伸ばす、個々人の目標への対応が個を育てる。
- ⑫否定意見(54) ・日常の教育活動で様々な体験活動を実施しているので、修学旅行中では必要ない。
・修学旅行の意義を「日本古来の文化」においているので、体験学習は取入れない。

(2) 実施計画・事前準備に関して

- ①実施計画(19) ・旅行計画全体を見直し必要なら体験学習学習を取り入れたい。
・学校のねらいにあわせた体験学習ができると良い。
- ②事前指導(57) ・学校職員の意思統一を十分図った学習体制を確立することが肝要。
- ③時間(8) ・課題を持って取組めるのはよいが、事前学習に多くの時間を取られた。効率的な時間の配分が必要である。
- ④班別活動(6) ・体験学習に対する事前の対応が十分なので安心して取組める。

(3) 体験内容に関して

- ①情報収集(52) ・受け入れてくれる事業所を探すのに大変苦労した。情報が欲しい。
・日程によって体験できる内容が限られてしまう。多様な資料提供を希望する。
・学校規模に対応した体験学習の場所と内容をどう確保するか。
・体験活動リスト等の準備が不十分で、教員側の理解度が低い。そのため十分な指導・安全確保ができてない。
- ②決め方(80) ・生徒一人一人が「自ら学ぶ学習」の一環として、意欲的に取り組めるようにするために、内容、時間、必要経費等十分検討する必要がある。
・一人一人の興味・関心に応じた体験学習ができるように、一人一人の選択能力を高めたり、目的を意識した活動になるようなきめ細かな指導が必要である。
・興味関心に基づいた体験学習を設定することにより、修学旅行への意欲を高めたり、日本の伝統・文化についての理解を深めたりすることができる。
・生徒個々の関心、意欲に合わせた内容にすることは難しい。
・総合的な学習に位置づけ、充実したものにしていきたい。
・体験活動が日々の教育活動、総合的な学習の時間に関連付けられるような内容にしたい。
・中学校の修学旅行は体験学習が必要。見聞と実体験。
・視野を広げ、身につくものも多いので、精選して生徒の実態に合ったものを選択する。
- ③現地でしかできないもの(11) ・環境問題や福祉の問題へ取り組むような体験学習は、修学旅行以外で取り組むべきであり、現地でしかできないような体験学習に重点を置いて取組ませたい。
・現地の“人”との交流を中心にした体験学習を設定したい。
・生徒同士、生徒・教師の交流ができる宿泊行事の中で、現地ならではの体験をさせたい。
- ④文化・伝統(11) ・単にそれぞれの職を体験させるのではなく、職人さんから生き方の指導を学んだ。
・日本古来の伝統文化を体験できる良い機会でもある。
- ⑤具体例(33) ・体験学習を取り入れることで、現地の歴史・文化遺産に多く触れられなくなっていたが、ワゴンタクシー使用で時間短縮し、体験学習と見学がバランスよかった。
・自然に直接触れることにより、生徒の物の見方が広がった。
・地方のグリーンツーリズム、村おこし等と連携して取組めるとよい。
・現地の自治会が紹介してくれた体験学習は良かった。
- ⑥娯楽的(5) ・体験学習は観光化されたものが多く単なる遊びになってしまう傾向がある。それより、事前学習をしっかりとさせ、伝統ある文化財産をしっかりと見学させたほうが良いと思う。
・文化や生活の違いに着目した体験学習を生徒が主体となって選択したが、そのときになると楽しむことに夢中だった。
- ⑦その他(42) ・個々の目標を設定し体験学習を実施する例が増えたが、内容を深めていくことが課題。
・体験学習の予約の大変さを感じる。
・生徒からの体験学習の希望がでない。生徒が関心を持てるような体験学習を研究したい。
・体験学習の内容と班編成との組合せに工夫が必要である。
・当日、プログラム通りに実施できない班のために即応できる体制作りを考えたい。
・時間が足りず、生徒が触れたり作業したりする体験が不足し、見学的体験学習が多い。

- ・体験学習を取り入れたいが、見学を多くさせたいという意見とどのように調整するか。
- ・体験学習の有用性は承知しているが、人的、時間的制約から十分な事前指導ができない。
- ・体験学習が唯一のものと考えない。内容をより吟味する必要がある。
- ・学習意欲を高めると同時に意欲の継続、学んだ内容を広める活動をどのようにするか。
- ・修学旅行の実施時期と体験学習内容の検討が必要である。
- ・個々の班で希望に応じて体験を組み入れればよい。体験だけにこだわる必要はない。

(4) 体験学習先(経費・施設・安全管理等)に関して

- ①経費(83)
 - ・満足度が高く金額に見合う目的の実践と、保護者への説明責任がある。
 - ・費用のわりに意義の認められない体験学習が多い。
 - ・体験させたいが、経費がかかりすぎる。
- ②時間・日程(23)
 - ・時間的な制限があり、十分な体験学習にならない。
 - ・生徒は移動に精力を集中し体験学習での成果が心配である。タクシーの活用も考えたい。
 - ・体験場所によっては混み合っていて、待ち時間が生じ、予定時間がずれてしまう。
 - ・2泊3日の日程で数時間の体験学習を捻出するのは難しい。3泊4日がちょうど良い。
 - ・3日間の日程の中で、1～2時間程度なら、検討してみる価値がある。
 - ・体験活動として、日程・時間的に見て適切な物がみあたらない。
- ③受入側(10)
 - ・地元の方の親切さもあり、安心して生徒たちを送り出すことができた。
 - ・市バスや地下鉄等交通の便も良く、学習を進める上で効果的である。
 - ・業者が慣れてきて、ポイントを押さえた指導をしている。生徒の満足度、成就感が高い。
 - ・業者の尽力で、一人一人が満足できる体験ができた。今後もよりよい体験をさせたい。
 - ・旅行会社の対応が良くなり体験学習を行いやすくなってきた。今後も利用したい。
 - ・体験先との十分な連携と協力が必要である。
 - ・生徒の受け入れ状況が不統一で、決定が難しい。
- ④連携(34)
 - ・体験先と十分な連絡が取れない。
 - ・受け入れ側が一方的に作成したプログラムの丸投げで行われている現状。
 - ・体験学習の内容によって、事前事後指導、留意点等違うので一律には決められない。
 - ・施設に生徒・学校の予約が集中していて、予約の確保が難しい。
 - ・体験学習は軌道に乗ってきており、それ程教員の負担にならなくなっている。あとは業者のサポート体制の問題である。
- ⑤生徒数(6)
 - ・人数によって体験できないもの、学校規模で価格が高額になったりする。
 - ・全体では体験場所が制限され、班別では内容は豊富だが経費がかかり妥当性が疑問だ。
- ⑥商業ペース(14)
 - ・商業ペースに乗ってしまう体験が多く、中には教育的効果の得られないものがある。
 - ・体験学習が観光事業の一環となっている現状がある。
- ⑦安全面(8)
 - ・体験活動中の生徒の安全確保と体験中の連絡の徹底について、今後も検討していきたい。
 - ・生徒の把握が難しい事故がおきたときの対応、補償問題など安全対策に課題が残る。
 - ・携帯電話を活用して、連絡がスムーズにとれた。

(5) 体験学習の成果に関して

- ①主体的(13)
 - ・自分で選んだ体験学習に熱心に取り組み、ねらいは達成できた。
- ②関心意欲(32)
 - ・興味関心に応じ、生徒主体の体験学習を設定できるようにしたい。
 - ・生徒が自分で選んだので関心・意欲が高まった。
 - ・少人数で体験学習でき、興味や関心の差にも対応できて良かった。
- ③満足成就(24)
 - ・体験することで、学習に対する充足度、満足感・成就感が高まった。
 - ・生徒一人一人 目標を持って取組ませることができた。
 - ・体験コースにより、充実感、満足感が異なる。
- ④教育効果(33)
 - ・その道を究めた人からの技術の伝達は短時間であろうと貴重な体験である。
 - ・事前学習の中で興味・関心のあるものを選び、主体的に活動することで、成就感を持ち、心に残るものができた。また、班行動を通して生徒相互のより深い交流が図れた。
 - ・体験することで、いろいろな感じ方で学習できたのではないか。
 - ・体験活動は刺激があり、ものの見方や考え方を柔軟にしてくれる。
 - ・1年生からの指導の積上げを基に、3年間の集大成として位置づけられ、人間形成を図る。また、今後(卒業後)の出発点でもある。
- ⑤継続(8)
 - ・体験学習を20年以上同一地域で実施し、地元と学校との関係も深い。
- ⑥疑問(2)
 - ・生徒の気持ちの実態に合った体験学習になっているか疑問。
 - ・体験に時間をかけるのではなく、班別で史跡を見学をする方が有意義である。
- ⑦その土地ならではの(33)
 - ・普段できない、その土地ならではの体験を取り入れていきたい。
 - ・雪かきボランティアや老人家庭訪問を取り入れている。地域の方も楽しみにしている。
- ⑧今後の活動へのつながり(12)
 - ・単なる体験したと言うことでなく、事前・事後指導や他の学習活動に繋がる学習としたい。
 - ・個々の意識が体験を通して実生活の中で高まることを期待したい。(全てに関心を持つ)
 - ・体験することは生徒にインパクトを与える。特に質の高い伝統文化に触れることは見たたり聞いたりする以上のものを与える。事前に入念に調べ、自らの足で訪ね体験することは、その後の生活にも生きて働く力となる。
 - ・体験学習学習をするために、日常の意欲的な生活を更に高める必要がある。
 - ・生徒同士の理解にもつながり豊かな情操教育ができた。

1. はじめに

昨年は「愛・地球博」と銘打って、約35年ぶりに日本で万国博覧会が開催されました。「自然の叡智」をテーマに掲げ、地球環境と今後の人類の生き方を考え全世界に発信していこうというのがねらいです。またそんな社会的な背景のもと、教育をとりまく状況は大きな変革を求められているといえます。価値観の多様化、都市化、少子高齢化、国際化、情報化など社会の変化が急速に進む中で、本校でもそれらに対応して生きていく生徒を育むために確かな学力と豊かな人間性と健やかな体を培う教育をめざそうとしています。そのために私たちが大切にしていかなければならない教育理念は「独歩」「信愛」「協働」です。その理念は以下のように本年度の教育課程にも引用されています。

以上のような社会的背景と本校のめざす方向から、総合的な学習の時間やそれにとともなう旅行的行事（修学旅行）を以下のようにとらえました。



私たち人間は、

誰もが成長したい、生き甲斐が欲しい、しあわせでありたいとねがっている。

だが、このねがいを自分さえ得られたらよいと思うのは自分勝手な考えだ。みんなが欲しがっているものなら、じぶんもひと、ともに得られるようにとねがうのでなくては人間ではない。

わたしたちが成長するとはどういうことなのか

それは

じょうぶで役立つからだを鍛え、自分で考える頭を養い、人間を観ずる温かい心を育てることなのです。

→ひとりあるきできる人間に (独歩)

わたしたちが生き甲斐をかんずるのは いつのときか

それは

やらねばならない課題がつかめて やるとよい手順がわかってでき やったことのねうちが認められたときなのです→みとめあいのできる人間に (信愛)

わたしたちが

新しい時代を創るということは

それは

一人一人のよさを光り輝かせ 地球規模でしなやかに発想し 生涯にわたって 自分をいきるためにひたすら努力することです→たすけあいのできる人間に (協働)

2. 本校における各学年総合的な学習の重点と活動内容（旅行的行事）

1年生では、総合的な学習の扉を開くために、「私たちの町岐阜」と題し、活動の手順と、総合的な学習活動への願いを膨らませることを主たるねらいとしました。具体的な学習活動については、班や学級を母体として、それぞれに課題設定を「福祉」「産業・文化」の視点から設定して、課題追究をしていきます。

次に、2年生では、日本の文化の発祥地「明日香」に舞台を移し、国を知り、国にかかわり、国を考えるなかで、わたしたちの心に脈々と流れているものに触れることを主たるねらいとしました。右に示すように、明日香の地には、今現在日本人が忘れかけている原風景が残り、人々の心に訴えかけるものが残っています。

そして、3年生では、世界に飛び出し、世界を知り、日本を知る中でよりグローバルな視野を持つ一方、言語や

初めて訪れた地なのに、懐かしさを感じる。そんな経験をすることがある。昨秋、奈良県明日香村周辺を巡ったときもそうだった。遺跡見学より風景に心奪われることしばしばだった。

点在する丘がなだらかな起伏をつくっている。田畑の間を縫って飛鳥川が流れる。いたるところにある柿の木には熟した柿が実り、彩りを添える。何の変哲もない風景かもしれない。心を波立たせるようなものがほとんど目に入らない、その穏やかさにひかれた。

初めて韓国へ行ったときも、同じような印象を受けた。街の路地や農村風景に、何ともいえない懐かしさを感じた。現代の日本が失いつつあるものが、まだ色濃く残っている。そんな思いが強かった。あるいは思う。飛鳥造営に携わったのは多く朝鮮半島から渡来した人たちだったから、原風景を共有するのか。(中略)

飛鳥川の上流に小さな集落があった。川沿いに古い家並みが続き、ひっそりとしたたずまいだ。いつのまにか古い時代に紛れ込んだような、しんとした気分がさせられた。どこにでもありそうで、しかしいつのまにか姿を消していきつつある風景だろう。

飛鳥で幼少、青春時代を過ごし、その後転々とした万葉歌人大伴旅人はしばしば飛鳥への望郷の念を詠んだ。原風景というのは、多くの人にとって故郷の風景だろう。そして誰もが懐かしいと思う風景も、また。

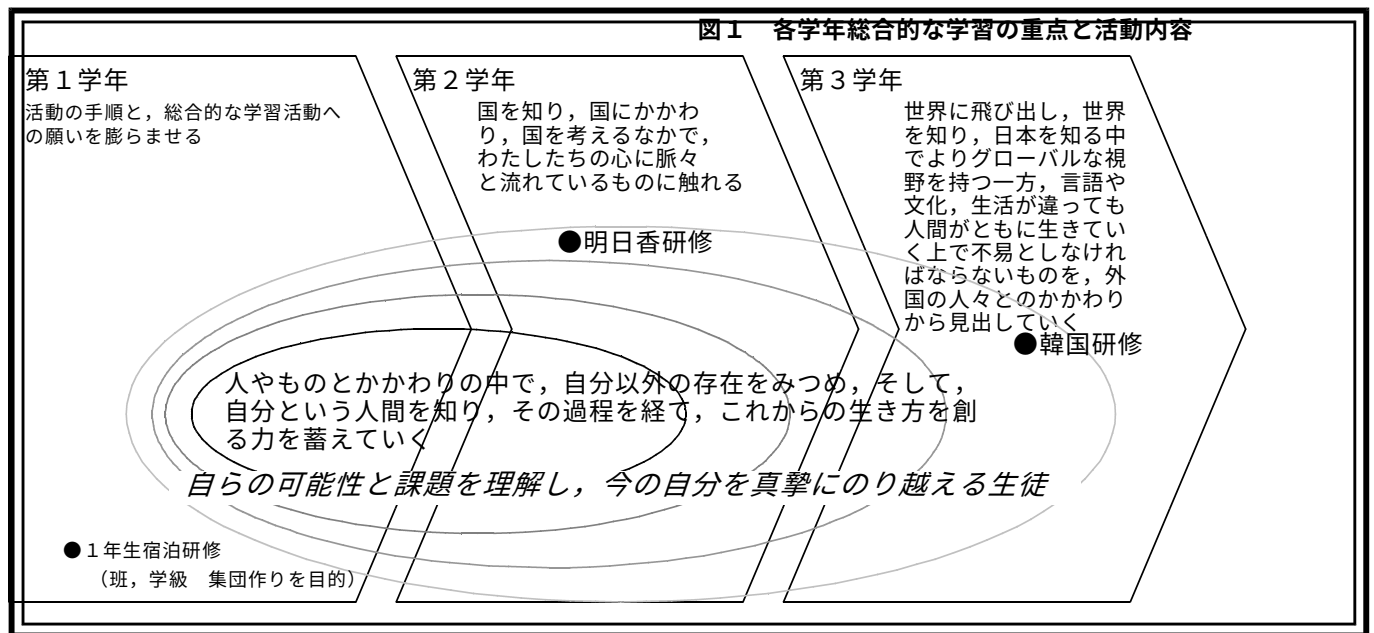
(2004・1・26「朝日新聞」天声人語より)

文化、生活が違って人間がともに生きていく上で不易としなければならないものを、外国の人々とのかわりから見出していくことをねらいとしています。具体的な学習活動として、たった2日半の短い期間ですが、実際に外国の地に足を踏み入れ、自分の目でみることで、外国の雰囲気を肌で十分に感じ、味わい、そして、外国の人々の心に触れていくのです。

このような、3年間の系統的な指導により、「人やものとかかわりの中で、自分以外の存在をみつめ、そして、自分という人間を知り、その過程を経て、これからの生き方を創る力を蓄えていく」ことができ、「独歩」の力を身につけた生徒が育成されるのではないかと考えます。

また、特別活動における旅行的行事は、体験的な活動であり、活動の課程において、生徒の創造力を高め、人間形成に役立つと考えられます。これは、総合的な学習のねらいとも大きな関わりがあります。

そこで、この旅行的行事を総合的な学習活動の一環として位置づけていくなかで、両者の関連を図り、より深く追求することにしました。[図1 参照]



3. 韓国研修へ向けての基本的な構え

4年前の平成14年度、初めて附属中学校の生徒たちが韓国ソウル市にあるホンウン中学校を訪問し、附属中の韓国研修の歴史はスタートしました。この時、生徒たちはホンウン中の熱烈な歓迎を受け、どの生徒も隣国の同世代の生徒たちと心温まる交流を体験し、多くの生徒たちが別れを惜しみつつ帰国しました。また、附属中とホンウン中は姉妹校提携をし、パートナーとしての歴史も始まりました。その後も、さらに姉妹校としての親交を深めてきました。

今回の韓国研修では、ホンウン中の生徒たちとの心温まる交流活動（国際交流）を一つの柱として、現在スタートしている韓国研修へ向けての総合学習（国際理解）との関わりを大切にしながら、これからの社会を生きていく国際感覚豊かな附中生を育成したいと考えています。

4. なぜ、韓国研修なのか・・・

現在の日本をさらによく知る上で、歴史的にもかわりが深い隣国である韓国を知ることとはとても重要な視点であると考えます。また、日本と韓国は、現在いくつかの大きな問題を抱えています。そのような状況を踏まえながらも、これからの社会を生きていく生徒たちに、広い視野から外国を見つめ、しっかりとした知識をもって自分自身で正しい判断をする力を身に付けさせたいと考えています。このことが、今後生きていくうえで、相手を尊重する心を育成する大きな扉を開いていくきっかけになると考えています。

5. 韓国研修の取り組みをスタートさせるにあたって

ホンウン中の生徒の附属中訪問も含めて、生徒同士が心温まる交流ができ、そうした交流を通して、国際人としての素養を養っていくことを大切にしたいと考えます。

《集団的側面からのねらい》

- 仲間とのかかわり合い、韓国での様々な人との出会い、ふれあいを大切にした研修
- ・ 学級の仲間と寝食を共にしながら、それぞれの与えられた役割を誠実に果たす中で、仲間と助け合う

ことの素晴らしさや仲間のよさを感じ、活動をやりきった達成感を味わう。

・集団で生活するマナーやルールなど、自分たちの生活について考え、価値ある生活を求めていくことができる。

《研修的側面からのねらい》

○ 韓国研修を通して、国際交流・国際理解の扉を開ける研修

・「歴史」「言語」「生活文化」「衣・食・住」などの視点から、事前の学習を行い、現地での体験を通して、これからのより深い学びに繋げる。

・広げ深めた視点をもって、自分が住んでいる町や、岐阜、日本などについて考えたり、国際理解とは何かについて考えたりする。

6. 韓国研修をどうとらえているか ～学年運営委員の提案より～

① 平成18年度第3学年学年目標より韓国研修を考える

学年目標は、次のような仲間の声に始まって創り出された。その声を紹介します。

・3年生という立場から考えていったとき、2年生や1年生の手本とならなければいけないと思う。そのためには、合唱、時間、清掃、学習を2年生で創り続けてきたことを3年生で完成させて、当たり前のようにしていかなければいけないと思う。そうすればきっと、1年生や2年生は「これが当たり前なんだ。普通なんだ。」と思ってくれるはずだと思う。(3年1組 Tくん)

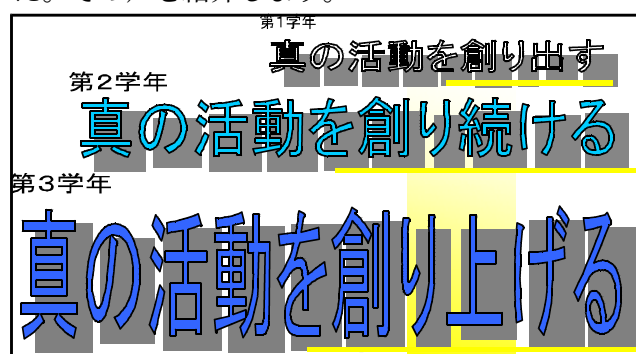
・3年生では、1年生から創り続けてきた真をきちんと創り上げなければ、この附属中学校を卒業したことにはならないのではないかと思います。(3年2組 Mくん)

・3年生というのは中学校生活最後の学年であり、附属の代表でもある学年です。1日1日が最後で、来年の今、この附属中学校で仲間と共に学び、勉強することができないのです。そんな貴重な1日1日だからこそ、大切に過ごしていかなければいけないと思います。また今では「創り続ける」だったけど、続けるではダメだと思います。この学年で創り上げなければ、今まで活動してきた意味がなくなってしまう。スタートがあればゴールがあるはずなので、みんなが納得のいく真の活動を創れるようにしたいと思います。私が特に意識したいのは合唱です。文化部として、真の合唱という面で、目標をつくっていきます。まずは合唱に臨む姿勢からきちんとし、声量、響きへとつなげていきます。(3年2組 Kさん)

・私自身、真の活動を創り出すことは、口で言うのは簡単ですが、実際に成し遂げることはとても困難だと思います。しかし、私たちは今まで何をするために、何のために取り組んできたかを考えると、わたしは「真の活動を創るため」だと思います。(3年3組 Gさん)

・「真の活動を創り出す」を初めて目標としたとき、「これは3年間かけて創っていくものだ」というふうだったはず。だから3年生は「真の活動を創りきる」……省略……しかし、安易な妥協はしたくありません。「これでいっか」というあきらめの気持ちではなく、「これだ」という確信を持って言い切ることができる真の活動を創っていきたいです。そして、創りきります。このメンバーで生活できるのはこの1年が最後です。だから、このメンバーの真の活動は、この1年で創りきります。(3年4組 Yさん)

・中学校生活は3年間で、今年がラストの1年です。2年生までは「創り続ける」などでもよかったんだけど、3年生でも「創り続ける」じゃ達成できないので「創り上げる」にしました。あと、1、2年でやってきたことを継続し、達成したいのでこれにしました。(3年3組 Kくん)



『真』をひとつのキーワードにして取り組んできたからこそ、その総括を迎えた3年生には、答えを出す使命があるのです。

② 韓国の地に舞台を移したとき

「形あるお土産ではなく形ないお土産を創っていきたい。その形ないお土産とは『真』の活動である。」とわたしたちはそう願っています。

どんな活動に対しても、『真』という言葉にこだわり続けて活動を創り出そうとしてきたわたしたちだからこそ、たとえ韓国に舞台を移したとしても、一貫してこの姿勢は変わりません。逆に変えてはいけなく考えます。

ただ、『真』をどのような活動のなかで創り出していくのか。第3学年の実際をみると、掃除や合唱、学習、時間について自分の動きに責任をもち活動している人とそうでない人の「**集団の2層化**」の傾向にあると考えます。

このような実情を考えたとき、やはり自分の動きに対してどれだけ迫ることができるかだと考えます。したがって、韓国研修では、自分の動きに焦点をあて、『真』の活動を創り出していこうと考えます。つまり、自分の担う係活動において、『真』の活動を創り出していこうと考えているのです。そのためにも、3つのこ

とを大切にしていってことにしました。

③スローガンを達成していくために

③ー１ 自分の係活動に対して『真』の活動を描ききるための係会

今回の研修でも、1人1役を担うことになります。その係は右の5つの係です。この中のひとつでも不十分ならば、班としても機能しなくなり、様々な活動を納得する形の中で創り上げていくことができません。だからこそ、どの係も1人1人が自分の係に対する使命感をもって、言い換えると「自分が動かなければ…」という意識をもって動いてほしいと思っています。ただ、係に対する使命感をもったところで、実際に動くとなるとなかなか動けない現状があります。人の動きをみて、自分も動くという姿がありますが、こうした現状の要因は、係内容を熟知し、いつどのように動いていけばいいのかといった、自分の中での『真』の活動をとことん描ききられていないことにあります。3回行われる係会で、どれだけ迫ることができるかがひとつの勝負なのです。

③ー２ 仲間の動きのよさを見つけ、『真』の活動を共有する反省会

よさ見つけをしていくことによって、どのような動きが『真』の活動なのかという判断基準を1人1人が高く持っていくことができます。そのためには、1人1人の仲間の姿を単に眺めるだけでなく、その人がとった動きに対し何をもって動いたのかといった、その動きの底流にある想いの部分を見つめていく必要があると思います。その動きと、底流にある想いを見つけていくことに意味があります。

1日目、2日目の夜に学級別反省会が位置づけられています。その反省会の中で、どれだけ語り合うことができるか、語ることができる事実を持つことができるかどうか勝負なのです。

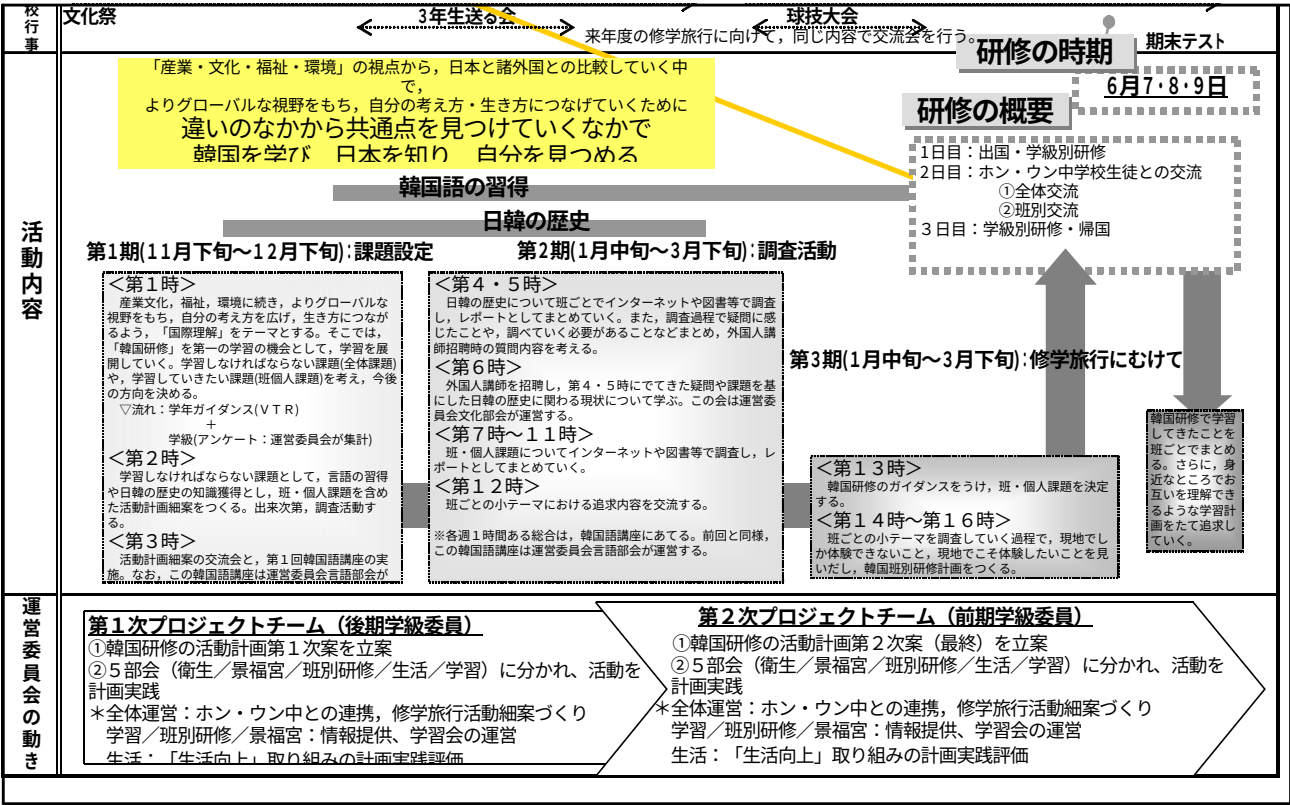
③ー３ 戻ってきてからの学校生活のなかで『真』の活動を創り出していく

この韓国研修も明日香研修や自然の家研修と同じで日常生活につなげていかなければ意味がありません。単に研修が終わって自分の係を全うすることができたで終わることなく、なぜできたのかやなぜできなかったのかといった部分をしっかり振り返り、そして、学校生活の中で担っている自分の係につなげていく必要があると思います。もちろん戻ってきてから反省会を行います。その会のなかで、自分が作成している計画表にどれだけ朱書きをいれることができるかが勝負なのです。

計画推進 (学年運営委員会)	生活係(班長) 事前活動の企画運営、生活全般の約束作りと見届け、部屋割り、バス座席表の作成
	衛生係(各班1名) 食事全般指導、健康観察、入浴の仕方と片付け指導、ホテルでの部屋の美化
	景福宮係(各班1名) 景福宮にかかわっての歴史や建物などの事前学習、当日の運営
	班別研修係(各班1名) 班別研修の企画運営(タイムスケジュールの詳細計画、研修時におけるルールの作成)
	学習係(各班1or2名) 韓国研修全般にかかわっての必要な知識(困ったときのQ&A、これだけは知っておきたい韓国語)などの資料作成

7. 指導の基本的な構え

ここでは、学活における韓国研修に向けての学びと運営委員をはじめとするリーダーの指導に対する概略を示します。



8. 平成18年度本校第3学年の修学旅行の実践より

① 主たるねらい

海を渡り、韓国のホン・ウン中の生徒たちと交流を深め、姉妹校提携をして4年が経ちました。それ以来、附属中学校の韓国研修・ホン・ウン中の日本でのホームステイ・E-mail交換などの活動を通して、両校の生徒たちはともに友情を育んできました。本年度も「パートナーの子とうまく話せるかなあ?」「去年来たホームステイの子と会えるからうれしい!」など、様々な期待と不安をもちながら、ホン・ウン中を訪れました。はじめはお互いに緊張してなかなか話せませんでした。しかし、準備してきた出し物を披露しあい、お互いに自己紹介しあう中で、少しずつ緊張がほぐれていき、キムチ作りや韓紙工芸などの活動に手に手を取り合って取り組むことによって少しずつ心を通わせていきました。また、語り合いながら異国の街ソウルを肌で感じるによって一層友情が深まっていきました。別れの時、住所や電話番号を交換する生徒たち・・・ともに抱き合い別れを惜しむ生徒たち・・・涙を流す生徒たち・・・再会を約束する生徒たち・・・本当に様々なドラマがありました。

3年生の総合的な学習活動は、「世界に飛び出し、世界を知り、日本を知る中でよりグローバルな視野を持つ一方、言語や文化、生活が違って人間がともに生きていく上で不易としなければならないものを、外国の人々とのかかわりから見出していく」ことを主たるねらいとしています。そして、中学校3年間の総括として、これまでの学習で耕してきた自分の生き方につながる想いをもって、力強く歩いてほしいと願っています。

② 学習活動の手順

[手順1: 学習に対する意欲づけと韓国についての基礎学習]

- ①一昨年度の韓国研修の様子や総合学習の様子をまとめたプレゼンを見ながら、具体的な学習活動のイメージをもつ。
- ②お互いの国の親しみ度や、将来なりたい職業、今熱中していることなど、日韓両国の世論調査や、附中生や韓国の生徒へのアンケートの結果をもとにしたプレゼンを見ながら、日本人と韓国人の感じ方や考え方の違いに気づく。
- ③学習プリントや図書館の本やインターネットを利用しながら、韓国に関する基礎学習（地理・歴史・生活・文化・言語など）を行う。
- ④国際交流センターから韓国人講師を招き、韓国の人々の生活・文化についての講演を聞く。また、疑問に思うことを質問したり、韓国語でのあいさつや自己紹介の仕方を学ぶ。
- ⑤ホン・ウン中生徒の附属中訪問に際して、学校案内・歓迎会・岐阜市内班別研修を企画し、実施する。

次に示すものは、韓国研修のプレゼンを使った説明後に抱いた、韓国研修に向けての思いと願いです。この生徒は、韓国についての基礎学習に対して積極的に取り組んでいきました。また、韓国人講師の先生の話にもじっくりと耳を傾け、韓国語の学習でも大きな声を出して練習する姿がありました。韓国研修の取り組みでは、韓国研修運営委員として、「集中して相手の話を聞こう。」「時間を守ろう。」「服装を正そう。」と学校生活におけるマナーやルールにこだわって仲間呼びかける姿もありました。これは、生徒に学習の筋道を知らせることや願いを持たせることは大切な指導の手だてであると考えます。

韓国研修のお話を聞いて、「早く行きたいなあ。」と思いました。とても楽しみです。韓国には行ったことがないので、とにかくいろいろな所に行きたいです。ホン・ウン中の子との交流もとても楽しみで、時間ぎりぎりまで一緒に話したり、勉強したりしたいです。でも、言葉が全然分からないので、ある程度韓国語を話せるようになりたいです。韓国は日本と隣の国なので似ているところがあるかもしれないけど、やはり違う国なので韓国のルールやマナーなどを守って失礼がないように、恥ずかしくないように行動しなくてはいいと思います。附属中生として・・・日本人として・・・そういうことを常に意識していきたいです。そういう3年生でありたいと思います。

[手順2: 個人テーマ追求学習]

- ①韓国について学習してきたことをもとにしながら、自分が疑問に思うことや、もっと深く調べていきたいことを考え、リストアップする。
- ②学級で自分が疑問に思うことや、もっと深く調べていきたいことを発表しあい、仲間の意見を聞く中で個人テーマを模索していく。
- ③仲間の意見を聞いた後で、個人テーマ案を設定する。
- ④韓国語・生活文化・食文化・歴史の4コースに分かれ、それぞれの担当教師の指導のもと、個人テーマを最終決定する。
- ⑤各コースに分かれ、テーマ設定の理由・追求の内容・追求の方法・これからの追求の見通しの計画を明らかにした上で、個人テーマ追求学習を行う。

次に示すものは、韓国語コースでのある生徒の想いです。自分の興味・関心あることを積極的に学習しよ

うとする彼の目の輝きは、「自ら創造的に学び、自らの生き方を見つめ考える生徒」を育みつつあるのではないかと感じさせるものでした。

ある生徒は、韓国について今まで学習した内容から、韓国語、特に韓国の文字であるハングルに興味を持ちました。彼はハングルの文字と音との関係をもっと深く調べ、学習していきたいと考え、個人テーマを「ハングルの歴史とハングルの音の規則性を明らかにしよう。」としました。

彼は、仲間と交流したり、担当教師と思いを交流していく中で、課題追求の方法として、NHKのハングル講座とテキストを利用して学習していきたいという思いを持ちました。そこで、彼はハングル講座とそのテキストを利用しながら、「ハングル文字は誰がなぜ作ったのか？」ということや、「ハングルの音の仕組みはローマ字の音の仕組みとよく似ていること」などを学習を通じて学んでいきました。そして彼は追求の出口としてハングルで自分の名前や自己紹介を書けるようにしたいという願いをもち、ハングルを書く練習を行っていました。この後の韓国研修の学習において彼はハングルで手紙を書き、ペアの生徒に送っています。手紙を書き上げた彼は「ハングルはまだ、表をみながらじゃないとなかなか書けないけど、簡単なハングルは読めるようになってきたよ。今度は韓国語をもっと話せるようになりたいな。」と笑顔で話していました。

[手順3：韓国研修での学習]

- ①ホン・ウン中の生徒と附属中の生徒を一对一でペアリングした上で、自己紹介カードを作成し、ホン・ウン中に送付する。また、返送されてきたペアの子の自己紹介カードを読んだ上で、TR-mailを活用して、E-mailでの交流を行う。
- ②個人テーマをもとに、韓国の伝統文化の体験（韓紙工芸・四物遊び・ハンボクと伝統の礼）やソウル市内班別研修（東大門・南大門・明洞周辺）、ソウル市内学級別研修（景福宮・民俗博物館・西大門刑務所博物館・戦争博物館・パゴダ公園・ソウルタワーなど）の計画をそれぞれ個人・班・学級単位で仲間と協力して作成する。
- ③ガイドブックや見学場所のパンフレット、インターネットなど様々なリソースを活用しながら、韓国の伝統文化や史跡、博物館等について調査する。また、それに関連した内容についても学習を深めていく。
（例 西大門刑務所博物館→3・1独立運動→ユ・ガンスン→韓国のジャンヌ・ダルク 等）
- ④ホン・ウン中の生徒との交流会に向けて、韓国語で日本の伝統文化の紹介やペアの子に対して韓国語や英語を使って自己紹介ができるように練習する。
- ⑤韓国研修において様々な異文化体験・交流活動を行う。
＜韓国研修の研修内容＞
 - 1日目・・・ソウル市内学級別研修
 - 2日目・・・韓国の伝統文化と伝統遊びの体験（トホ・クルロンセ・セギ蹴り・駒回し）
ペアの生徒とともにソウル市内班別研修、講話
 - 3日目・・・ソウル市内学級別研修
- ⑥韓国研修で収集した資料をまとめ、韓国研修で感じたこと、発見したこと、学んだことなどをまとめ、学級の仲間と交流しあう。
- ⑦ホン・ウン中のペアの生徒やお世話になった先生方に、韓国研修のお礼状を書いて送付する。また、ペアの生徒とのTR-mailでの交流を継続していく。

韓国研修での学習において生徒たちはどの活動にも生き生きと取り組んでいました。特にホン・ウン中の生徒との手紙やE-mailでの交流では、ホン・ウン中のペアの生徒の自己紹介カードをうれしそうに眺める生徒の姿、見慣れないハングルや英文を読んで「これって何って読むんやろう？」と質問に来る生徒の姿がありました。また、ペアの生徒と、学習してきた韓国語や英語、また様々なジェスチャーを使いながら、必死で自分の思いを伝えようとする生徒の姿がありました。ソウル市内班別研修では、笑顔で手をつなぎながらソウル市内を歩く生徒たちの姿がありました。そして、空港まで見送りにしてくれた韓国の友達の姿に涙し、再会を約束する姿もありました。これら韓国研修での学習を通して言えることは、生徒たちは韓国の地で、これから生きていく上でとても大切な「他者との心と心の通い合わせることの大切さ」を体験することができたのではないのでしょうか。韓国の友達との友情を育む経験は、人間関係が希薄といわれる現代を生きていく生徒たちにとって一生忘れられないものとなるに違いありません。

韓国の生徒と日本の生徒との交流を進める上で、私たちは「日韓の歴史上における関係」の理解なくして真の交流はできないと考えています。豊臣秀吉による朝鮮出兵により苦しんだ韓国の民衆やそれに立ち向かい続けた人々の思い、日帝による韓国併合に最後まで反対した人々の思い、弾圧され続けても3・1独立運動に参加し続けた人々の思い、祖国の独立を願い牢獄の中で拷問を受け続けて死んでいった人々の思いなどに共感することが必要だと思えます。ある生徒は、西大門刑務所博物館で、ボランティアガイドのおじいさんから、博物館の展示資料の裏側にある日本の憲兵が韓国の人々に対して行った行為の数々のお話を聞いて、胸を詰まらせていました。またある生徒は牢獄の床に残された指で掘られた将棋盤の跡をみて、当時捕らえられていた人々の気持ちに共感していました。数々の人々の命を奪った死刑場、韓国のジャンヌ・ダルクと

言われる少女ユ・ガンスンが拷問の果てに命をおとした女性監獄跡などを実際に肌で感じる中で、涙を流す、そんな場面もありました。韓国では毎日、たくさんの保育園や幼稚園の園児たちが西大門刑務所博物館を訪れ、日帝により独立を奪われた祖国の悲運について学習し、愛国心を育むように教育を受けています。そんな姿を間近でみた生徒たちは、理屈抜きで、平和の大切さを実感し、日本人の行ってきた歴史的事実を考えなければならぬという思い立つことができたのではないのでしょうか。以下は西大門刑務所博物館を訪れた生徒の思いです。

「西大門刑務所を見学して、日本の人たちが歴史の中で韓国の人々にいかにひどく、残酷なことを行って来たのかがよく分かりました。立つことができないような狭い部屋に閉じこめたり、拷問で耳をはぎ取ったり・・・女の人は地下の牢屋に入れられ座ったまま姿勢で閉じ込められていました。話を聞いていると涙がでてきました。韓国ではこういうものを幼稚園ぐらいのこどもにも見せている。何か複雑な気持ちでした。韓国の子たちはこういうことを勉強してきて、私たちのしてきたことを知っているのに、私たちにとても親切に接してくれます。私たちも人への接し方をもっと考えていかなくてはならないと思います。」

このように感じる生徒が多くいた中、「少し日本について悪く言いすぎているのではないか？」と疑問を感じた生徒もいました。彼は日本に帰国した後、仲間に自分の感じたことを精一杯仲間に伝えていました。この韓国研修において、生徒たちは日本では経験することのできない貴重な経験をし、自分の生き方を見つめ直すことができました。



③ 活動を通して

生徒たちは、この学習において、近くてもっとも遠いと言われる韓国について、生活文化や言語、食の目に見える違いだけでなく、「もっとも遠い」といわれる所以を探っていく中で、世界の中の日本、そして自分を見つめることができました。

そして、生徒たちは、同世代の異国に生活する友達との心温まる触れあいを通して、言葉が通じなくても、心と心のふれ合いがあればともに理解していける、人間関係で不易とするものを掴むことができました。これらの経験や学習は、生徒たちが「自分という人間を知り、これからの自分の生き方を創る原動力」となると考えています。

9. 終わりに

本校では、総合的な学習の時間の趣旨を「豊かな人間教育の時間」として捉え、とりわけ「独歩」の姿を具現する場として、3年間の系統的な指導を通して、「自己の生き方を見つめ考える」学習活動を展開してきました。さらに、特別活動における旅行的行事との関連を図りながら実践を積んできました。

総合的な学習活動を考えたとき、扱う題材は違って、そこには戻るべき原点が必要であるし、それを軸に活動を展開していくべきだと考えています。何を仕組んでいくかに焦点が当てられた総合的な学習活動ではなく、「どんな」生徒の姿を描き、そして、そのためには「どんな」資質・能力を必要としていくのかを鮮明に描いていく必要があると思います。わたしたちは、それを本校の教育理念に置きました。その上で、「どのような」活動を仕組んでいくのかという方法論になっていくと考えます。

シンポジウム

コーディネーター

高階 玲治 教育創造研究センター所長

シンポジスト

大橋 久芳 台東区立忍岡中学校校長

増田 行義 岐阜大学教育学部附属中学校副校長

高橋 正洋 近畿日本ツーリスト第三教育支店次長

杉本 敏和 全修協大阪事務局長

高階 それでは、これからシンポジウムをはじめたいと思いますが、今日は、先ほど「海外修学旅行の動向」、続いて「体験学習の成果と課題」、という貴重な発表をいただきました。それに「修学旅行における海外交流活動」ということで、韓国に行ったご報告をいただきました。

このことを踏まえながら、これからシンポジウムを展開していきたいと思います。尚、お手元に質問用紙が入っているかと思います。この時間の途中で少し休憩を取りますので、ご質問やご意見など記入して出していただきたいと思います。

このシンポジウムは、大きく二つに分けて考えたいと思います。

一つは、これまでいろいろな修学旅行が実践されてきており、成果も積み上がってきていますが、課題も沢山あります。ここでは新しい時代の教育に向けて、修学旅行に求められるものとは何か、修学旅行のあるべき姿は何か、あらためてそのことを今の時代として考えていきたい。そういう先のことを目指した話し合いを最初に行いたいと思います。

後半では、児童生徒が生き生きと活動する。そういう修学旅行のあり方とはどうあればよいのか、子どもにとっての修学旅行、修学旅行を通して何を身に付けるのか、何を学校として大事にして実施したいのか、そのようなことで二つに絞って話し合いを行いたいと思います。

そこで、最初に新しい時代の教育が修学旅行に求めるものということで、最初は大橋先生から、それから杉本さん、増田先生、高橋さんの順で、4人の方にお話をいただきたいと思います。

それでは、大橋先生にお願いしたいのですが、新しい教育と修学旅行をどう考えるのか、これからの方向について、少し総括的なご意見になろうと思いますがよろしくお願いします。

大橋 それでは、新しい教育と修学旅行という関係をどう捉えていくのかということですが、新しいこれからの教育というのは、現在、中央教育審議会等で審議が進められております。従って、その内容を若干押さえておく必要があるだろうと考え、そのことから話を進めていきます。

ご存知のとおり、新しい時代の義務教育の創造ということで、平成17年の10月に答

申が出されております。また、義務教育の構造改革の行程表が今年1月17日に出され、教育改革のための重点行動計画ということで、この行程表が示されたわけであります。

これらの中身を見ますと、修学旅行と関わるような内容も数多くあるように思います。

特に、これからの教育においては、活力のある人材を育てる。ということが1点あるかと思いますが。そのためには、学習指導要領を見直して、基礎・基本の徹底と、自ら学び自ら行動する力の育成ということが言われておりますし、学ぶ意欲や好奇心の育成といったことが謳われております。また、自立し挑戦する若者の育成ということで、キャリア教育でありますとか、職業教育の充実が謳われております。また、家庭・地域の教育力の向上という場面では、子どもの基本的生活習慣の育成といったキーワードがあるかと思えます。さらに、充実した教育を支える環境の整備というところでは、安心・安全な学校、あるいは、ICTを利用・活用した教育の推進、また、教育費負担のあり方の検討といったような内容が挙げられております。

このような、3つの視点で国家社会の中で活躍できる心豊かで逞しい人づくり行うのだ、という内容でありました。

また、現在も中教審の教育課程部会の審議が続いておりますが、今年の4月にその審議過程が報告されております。その中では、人間力の向上を図るといったことについて、特に学習や生活の場づくりを進めていくためには、学校の教育内容及び教育方法について、実生活と一層意図的に関係付ける必要がある、といったような主張が述べられておりました。

具体的には、発達段階に応じて自然体験・社会体験・職場体験・文化体験等の適切な機会を設定することが求められる。というふうに謳っております。

また、確かな学力の育成では、習得型の学習と探求型の学習をあわせて、同時に進めながら、生徒の確かな学力をつけていくのだ、といったような内容でありました。

また、子どもの社会的自立の促進ということが謳われておりまして、基本的な生活習慣を定着させるとともに、社会生活を送る上で、人間として持つべき最低限の規範意識を青少年の時期からしっかりと身に付けさせるべきであるといったような主張もありました。

また、人生をより豊かなものにするため、感性や想像力、あるいは、表現力の育成も一層重要な課題であるといったようなことが述べられております。

また、現在義務教育に対しましては、様々な分野から教育の要請が来ておりまして、情報だとか環境とか法とか経済とか、あるいは、金融とかあるいは福祉、食育といった教育の重要性が求められているのが現状であろうかと思えます。

また、総合的な学習の時間におきましては、現在、いろいろな形で各学校工夫をしながら進めているわけですが、こういった総合的な学習の時間と特別活動との関わりをどう位置付けるか、といった内容についても審議をされております。

このようなことから、これからの修学旅行については、特活領域だけでは進まないだろう。あまりにも教育に対する要請が多い。また、多様化している。その中で、若し修学旅行がそういった教育のニーズに応えるならば、一層多様化された修学旅行になってくるのではないかな、ということを考えております。特に、地域の自然や歴史、あるいは産業や生活文化といったものを地域の人々との交流を通して学習していくといったような体験型の学習が一層広がりを見せてくるのではないかなという感がしております。

高階 ありがとうございました。今、大橋先生がこれからの修学旅行のあり方に向けてかなり総括的なお話をいただきました。具体的な中身については、これから論議したいと思いますが、新しい教育に向けて、修学旅行の見直しというものはこれから非常に必要になってくる。ということは分かるのですが、現状として今の修学旅行はどのように進められてきたのか、そのことで、杉本さんは修学旅行を支えてこられた方ですので、今の変わり方に対して、具体例を交えながら話をいただければと思います。

杉本 全修協の杉本です。先ほど、大橋先生からきっちり体系的にまとめていただきましたので、それ以外のことは無いのでありますが、少し昔のことをお話させていただいた後、近畿地方での動きというようなものをお話したいと思います。

私は、中学校3年生で修学旅行で東京に連れてきてもらいましたのは、昭和31年6月です。まだこの中には生まれてない方が沢山おられると思います。

その当時は、情報源といえば新聞・ラジオ以外にはありません。文字と音だけが情報源でした。修学旅行に行く際の学校からのしおりというのは、先生が手づくりでガリ版刷りというのをご存知ない方も沢山おいでになるかもしれませんが、先生が作ってくれたしおりで、絵は一切ありません。写真もありません。文字ばかりでした。それをもらって東京に行きました。

大人でさえ、私の村で東京に行ったことがあるという人は数えるほどしかなかった時代であります。先輩たちが修学旅行に行って東京ってすごいところだぞ、という話を聞きますが、一体何がすごいのか、ま、楽しいという話を聞いて、楽しさは分かります。小学校の修学旅行を経験しておりますから・・・。

実際東京に来て、私をはじめ友達が口に出して言うことは、やはり、東京ってすごいなあ。であります。何がすごいのか、深く追求していただくと少しつらいものがありますが、とにかく、東京というところはすごいなあ。感動する心というのは、その当時の子どもは持っていたように思います。しかし、今の子どもは、日本の出来事だけではなく世界中のあらゆる出来事がリアルタイムに、茶の間で、毎日、見ようと思えば見ることが出来る。また、家族旅行で、日本国内はおろか、海外へ家族旅行で行っている子どもも沢山ある。ですから、私たち昔の人間のように、目的地に行ってすごいなあとか、訪れた喜びとか、風景を見て感動するとか、それは、今求めるほうが無理なのかも知れません。

そういう時代の子どもを修学旅行に連れて行って、感動させようと思えば、これはなかなか並大抵の方法ではそうなってくれにくい時代になっている。

近畿地方では、今、全修協の調べでは85%の学校が何らかの方法で体験学習を実施しています。どの辺からを体験学習というのか、どの辺は体験学習と叫ぶのか、ということは、私たち調査する側でありきっちりした定義を申し上げておりませんので、かなりあいまいなところがあるかもしれませんが、それでも85%の学校が何らかの工夫が要るところの、その工夫が体験学習になって現れてきている。という風に思っています。

今、はっきりしているところで、近畿地方で25年前から、体験学習に取り組んでいる学校があります。昨年度、その学校では、子どもたちに役に立つ修学旅行とは一体何なの

かということを経験して見直しをしよう、ということで、検討会を立ち上げ、話し合いをしましたが、保護者の皆さんからは、今の体験を中心にした修学旅行を続けて欲しい、卒業生が文集に書く思い出の中に、体験学習をした修学旅行のことを書く生徒が大変多い、ということから見直しが出来なかった。まあ良かったのではないかと思います、そういう深い体験学習をされている学校も今出てきております。

また、時間があれば後でご紹介しますが、ただ、行って簡単に何かを体験する、先ほどの全修協からの報告の中に、体験学習は今後とも実施しないという学校は約9%ある、ということでしたが、理由は、遊び的なものが多い、という理由で、多分私の聞き間違いかもしれませんが、それは学校が考えることであって、大きな理由にはならないのではないか、そこは、業者さんなり、いろんな方と相談すればいいことであって、やはり、大切なのは、修学旅行で子どもの成長に役に立つ修学旅行をさせる。その努力を今悩まながらしているところだと思います。

以上でございます。

高階 ありがとうございます。昔の修学旅行は感動があった。今は感動させることは大変だ。という非常に素晴らしいお話でした。

続けて増田先生にお願いしたいと思いますが、丁度韓国に行って4回目だったそうですが、それは、感動だったのか緊張だったのか、あるいは異文化理解だったのか、また新しい修学旅行の新たな体験があったのではないかと思いますのですが、そのことについて、韓国というか異国における体験をお話いただきたいと思います。近くて遠いのが韓国といわれておりますが、そこでの体験はどうだったのか、お願いします。

増田 お手元の冊子の18ページに、子どもの感想が出ております。一つの例ですが、この子はこんな思いで書いてきています。こういった思いがいっぱい出た研修だったなあと考えています。答えは子どもが見つてきますから、これが将来の財産になればなあと考えています。この子は西大門の刑務所にも行ってきました。日本が実際行なってきてしまったことが展示してあります。それを見ながらこういう感想文を書いております。

そこを出たときに老人の方が、ベンチに座っていて、私たちが日本人と分かったと、韓国語で怒っていることは分かるのですが、何を言っているのか分かりませんでした、怒りの言葉をぶつけていました。そういう場面もありました。これも現実なのです。

2日目に先ほど交流活動を中心にとということでお話しましたが、時間がなくて詳しくお話できませんでしたが、姉妹校提携を結んでいるホン・ウン中学校があります。韓国、特にソウル市内は地域によって、言葉は悪いですが上流のところと普通のところがあるようです。ホン・ウン中学校は中流の方が集まっているところの学校です。そこでの交流活動は、最初に向こうの子どもたちが自分の国のことを自慢というか、紹介してくれます。いろんなメニューがありました。例えば服装、チマ・チョゴリを初めとして、韓国の伝統音楽とか、食べ物とか、保護者の方も協力していろんな活動の場を作っていただきました。それに子どもたちがそれぞれ、自分で選んだものに参加して一緒に子どもたちと活動しました。これで向こうの方々の歴史を知り、思いを知る。その後、ホン・ウン中学校の3年生の立候補した子どもたちが、本校の生徒をソウル市内の案内をしてくれました。本校も

事前にコースを作っていましたので、それに沿ってソウル市内を案内してもらいました。

実はこんな場面がありました。向こうの学校生活では、学校内でアイスクリームなどを食べられるのですね。その風習ですから、市内見学のときに向こうの子は親切におごってくれるのですが、その時、うちの子達は、うちの学校ではこういう事はいけないことだと、その約束を守ることが、この研修を成功させる上で大切なことだと、ちゃんと説明して断ってくれたのですね。なぜ分かったかという、後で聞いたのですが、向こうの学校の生徒が先生にそのことがちょっと悲しかったと言ったらしいのですね、その先生から聞きましたので、こういうことなのでもう1回子どもたちに説明して下さいとお願いしました。ちゃんと断われたことはすばらしいことだと思いました。

それから、その日の夕方、一番疲れていたときです。ホテルで1時間半ほど、韓日交流協会の方に講演をいただいたのです。「これからの韓国と日本」というタイトルです。その方は統治時代のことも体験していて、日本にお見えになった方なのですね。法政大学で勉強された方なのですが、その方が事実をきちっと見つめなければいかんと、逸らしていたら本当の関係はできない。事実は事実として、本当にお互いに隣同士きちっと頑張って、本当の友好、お互いが心の通い合う関係を作りたいと訴えられました。

1時間半の講演でしたが、私が感動したのは、本当に子どもたちは居眠りもしないで真剣に聞いていました。この体験はきっと子どもたちの心に生きていると思います。

いい研修でした。どういう内容・ねらいを与えたかによって、子どもたちを成長させることができるかということを実感したわけです。

あらためて、教育活動の中で、この修学旅行を通して子どもたちとどう付き合っていくのか、多分それは学校管理と関わってきますから、その点を明確にしながら、場と活動の計画をしなければいけないと思っております。

以上です。

高階 ありがとうございます。

韓国で新たな感動を、ということで、それは本当に大変な思いがあったのではないか、そんな感じがします。

それでは、高橋さんをお願いしたいのは、修学旅行にいろいろ変化が見られるようになってきた。高橋さんはツーリストにお勤めですので、そういう点でこれからの修学旅行にはこういう動きが必要ではないか、というような話をお願いしたいと思います。

高橋 近畿日本ツーリスト東京第3教育旅行支店の高橋と申します。よろしくお願い致します。

今、いろいろ先生方からいただいたお話を受けまして、修学旅行を側面からサポートさせていただいている旅行会社の立場として、現状の修学旅行、そしてこれからあるべき姿というものを見ていけたらいいな、と考えております。

ここ数年の修学旅行の動きとしまして、旅行会社の立場から見て五つほど、変化というか少しずつ変わってきたなという点を先にまとめさせていただきます。

先ず一つ。今までのお話の中で沢山事例も出てきていますが、見る旅行からやってみる旅行へ。この動きは非常に大きなものがあると思います。見学が中心の旅行から体験が中

心の旅行になってきているということです。具体的には、農業体験とか漁業体験。あるいは農家への民泊、あるいは伝統工芸体験、座禅の体験とかそば打ちとか、うどん体験のようなもの、それからスポーツ体験ですね。サイクリングですとかカヌーですとか、私どもの支店の扱いではないのですが、ホノルルマラソンへの参加などという修学旅行も実施されているようです。先ほどから話題になっているようですが、いわゆる体験とはどこから体験というのか境がはっきりしない部分があります。もう一つの問題として商業ベースになりがちということもありまして、この辺は旅行会社としても今後検討課題と捉えております。体験に関しては、様々な自治体ですとか、公的な機関・団体、といったところとの関係も非常に大切になってきます。

二つ目の特色としまして、コース別の旅行を実施される学校が非常に多くなってきているということです。例えば、国内でも数コースを設定されて、それぞれ生徒さんの希望に合ったコースを選んでもらい参加していただく。より本人の希望、あるいは適正に合った旅行を実現したいとの気持ちの現れだと思います。学校によっては、国内だけでなく、国内と海外のコースから選択、あるいは、海外でも複数コースを設定し選択。これはまだ計画段階ですが、ある学校では、オーストラリア、カナダ、イタリア、韓国の4カ国を設定して、その中から生徒が希望して、自分の行きたいコースに行くというような修学旅行を計画されている学校も実際に出てきております。また、同じ国に行く海外修学旅行でも、通常の見学を中心としたような1週間程度の短いコース、それに加えて3週間くらいに期間を伸ばして、現地でのホームステイ、あるいは学校体験を入れたコース、両方並行して設定をしましてどちらかを選ぶ、というような学校も出ております。実際この学校が希望を取ったところ、全体で200名の内、短いコースの希望が約15名、残りはすべて長いコース、3週間のホームステイ・学校体験付きのコースという結果になっています。

その他、海外では、先ほども全修協さんの統計にもありましたように、人気の国としましては、東南アジアの国々、それからオセアニア・あるいはカナダ、こういったところが安全性も含めて、人気があるようでございますけれども、特に東南アジアに関しては、平和学習ですとか、歴史認識といったところ、オセアニア・カナダに関しては環境学習ですね。こういったところを主なテーマとされている学校さんが多いように思います。

四番目として、これもお話に出ているようですが、事前学習、事後学習、これに非常に力を入れている学校さんが多くなって来ています。これは、旅行の期間だけでなく、3ヵ年あるいは私立の中高一貫学校ですと、6ヵ年トータルでの捉え方になるかと思います。私ども旅行会社のほうも、いろいろと事前学習・事後学習で、先生方に使っていただけるような材料を提供させていただくのですが、これはお仕着せのものでは、おそらく、それぞれの学校さんの目的を達成出来ないと思いますし、それぞれの学校の目的に応じたプログラムというものを、先生方と相談させていただきながら、我々のほうもいろんなご提案をさせていただくという形が望ましいのかなと考えております。

最後五つ目としまして、これは旅行の内容と直接関係ないのですが、いわゆる安全対策ですね。危機管理。これを強く意識されて旅行に臨まれる学校さんが多くなってきているように思います。2001年に同時多発テロで、海外を計画されていた多くの学校さんが、取り止め、国内に振り変えたケースがありました。その後も2003年のSARS、あるいはその後の鳥インフルエンザでも2001年ほどではありませんでした、いくつかの学

校さんが海外の取り止めという形になっています。その意味で、危機管理あるいは安全管理、こういったものを学校さんとしても真剣に捉えられていらっしゃるし、旅行会社としても、海外の情報を一番最先端で最新の情報をつかめるのは私どもということになるかと思いますので、これは、私ども現地の支店あるいは外務省といったところとの連携を取りながら、より正確な、より新しい情報をご提供できるようにと考えています。あわせて、生徒さんの健康管理の面もございます。医療関係ですね。日本旅行医学会というのがありますが、そちらの資格認定添乗員なども、私どもは積極的に資格を取るように会社としても進めております。いわゆる安全管理に対する意識というものも大切になってきていると思います。

以上五つの件でお話をさせていただきました。

高階 ありがとうございました。

修学旅行というのは、学校だけが企画して推進するというのではなく、こういう周りの方々に支えられて、いい修学旅行ができるというような、そういう面を大きく踏んでいる学校の教育活動なんですね。両者が一体にならないとなかなかいい活動が出来ないという。今4人の方にお話をいただいて、丁度最後になったときに高橋さんから今のようなお話があって、もう一回大橋先生に戻って、一番最初に言った、これからの修学旅行のあり方から見て、今までの3人の方のお話をどう考えていったらよいか、そのことでお話をしたいと思います。

大橋 以前の修学旅行は、集団的な形で旅行をするというのが主流だった。学校が最低限生徒に見させたい、あるいは学習させたいところを押さえ込んで、その範囲の中で学習をさせていた。というのが以前の修学旅行の形態だったと思うのですが、今は、同じエリアの中でも、班行動といった形で、自分で課題を持ち、その課題解決をするといったような学習が多くで多くの学校で取り入れられていると思います。

そういった形態の中で、本当に課題がしっかりつかめているのか、いないのかですね。そのあたりの学習の深まりという部分では、もう少し我々もしっかりと見ていかなければならないことかなと、いう風に思っております。もう1点は、東京の場合ですが、京都駅に着いたら、すぐ班行動、で、宿で教員が待っている。その間電話等で連絡は取るにしても、本当に学習の深まりというものが、出来ているのかどうかですね。このあたりはもう少し学校としても、充分検証していかなければならないことかなと思いますし、こういった旅行と集団行動をどう考えるか、あるいは、社会の規範意識をどうするのか、といったことも課題があるように感じております。

高階 ありがとうございました

それでは、杉本さん、付け足しやご意見ありましたらお願いします。

杉本 先ほどの続きになるかも分かりません。東京農業大学の渡部教授のご講演の一部ですが、「今の子どもたちは、自分で考え、判断して正しく生きていくということが出来ない。付き合い下手である。人任せで我慢が出来ない。高度情報社会であふれるほどの情報に包

まれてはいるが、それを利用した疑似体験の中で子どもが育っている。そんな中で分かったつもりではいるが、媒体を通してのことであって、生の付き合いが少ないし、生の体験がほとんどない。」という風にいわれておりますし、「こういう時代だからこそ、ゲームにはない直接体験や生身の人間との付き合いが大切となってくるから、そういうことに重点をおいた修学旅行にしてはどうでしょうか。」というお話でした。

こういう環境の中で育っていますから、自分の発した言葉が相手にどのような心の傷を与えるのかとか、そういうところまでは深く考えられない。

私も通勤に電車の中だけで、1時間近くおりますが、若い人たちは、携帯電話で話をしませんから迷惑にはなりませんが、メールを盛んにやり取りをしています。よく話を聞いてみますと電車の中だけでなく、家に居るときでも相手の声を聞いて話をするのではなくて、メールでやり取りをしているのだそうです。多い人になると一日50本とか、60本とかのメールが入ってくる。それに簡単な答えをして、次にまたメールがもらえるような返事をする。どんなテクニックか私には分かりませんが、そういうのがあるのだそうです。

そういう生活をしておりますから、生の人間の付き合い、触れ合い、そういうことが修学旅行ひとつだけで子どもたちを変えろというわけには行きませんが、あらゆる教育の機会を捉えて、円満な人格の形成ということになっていくのが、あるべき姿ではないかというふうに考えております。以上です。

高階 ありがとうございます。

増田先生にもと思いますが、修学旅行の現場での感動体験だけでなく、事前に学校でこういうことをやってとか、そういうことが沢山あって現場での感動に結びつくのではないかと思うわけです。学校でこれだけのことをやって、そこの積み重ねというような、先ほど話のあったようなことをもう少しお話いただけませんか。

増田 報告書の27ページをごらんになって下さい。

ここの8番のところに、平成18年度の本校第3学年の修学旅行の実践より、ということが書いてあります。そこに②学習活動の手順として三つ書いてあります。これは修学旅行に行く前に子どもたちがこのことに関わって学習したことです。

やはり、事前学習がきちっとしていないと、現地に行っても遊びになるということは、痛切に思いますので、今回の場合はこの三つのことを、基礎学習、個人テーマ、それから韓国研修で学習を何をするか、ということで、ここに書いてあるような手立てで研修しました。それから、もう一つは、事前・事後も関わって考えましたことは、26ページに出ていることですが、キーワードで「真」という言葉がありますが、やはりこれは、日常の自分たちの生活のことです。中身の問題です。韓国研修を今までの活動の繋がりの中で、自分や仲間や、自分たち学級の生活を見つめなおす場として位置付けてきたということです。具体的には、係活動、反省会、それから戻ってきてからの活動などが書いてありますが、君たちが事前・事後の活動をきちっとやっていくと行く資格がある。ということで、日常生活と絡めながら考えさせてきました。この後、本校の場合は、研究発表会もありまして、学校生活の中でしっかり見つめなおしていこうじゃないかということで、学習の中で手段

を変えてやってきたわけです。そういうこともあって、修学旅行というのは教育課程の中でやる値打ちが出てくるのではないかと思います。そういう思いで、今おります。

高階 ありがとうございました。

最後にまた、高橋さんですが、ツーリストの方はこんなふうにお膳立てを考えて、準備なさっている。でも、学校はあまり乗ってこなくて、おんぶに抱っこで、それにだけ従っているような、もっと学校はこんなことをやってくれたらなあ、というようなことを感じることがありましたら、お願いします。

高橋 私どもの商売の部分に関わることもありますので、話しにくいこともあるのですが、もちろん、旅行会社のほうでいろんな素材をご用意させていただいて、事前学習の部分も含めて、それを学校さんにご提案させていただいて、お取り上げいただけるということは、非常にありがたいことではあるのですが、繰り返しになってしまいますが、いわゆる事前学習というものは、当然、学校さん毎によって旅行の目的というものがあるかと思います。従って、事前学習も同じ所について同じ体験をするにしても、必ず学校独自の事前学習が必要なんだろうと思います。私ども旅行会社としては、学校のそこに行くねらい、体験をするねらいをよく相談をさせていただいた上で、その学校さんのお考えであれば、こういう事前学習が効果を持つのではないかと、いうようなご提案させていただくことかと思えます。一番大切なことは、先生方や手伝いをさせていただく旅行会社の人間の情熱の部分もあると思いますので、いろいろお話をする中で、こちらのほうからのご提案を、その都度させていただくという形になるのかなと思います。増田先生のところの事前学習の内容を、今日はじめて拝見させていただいたのですが、おそらくこれだけの事前学習をするためには、相当の先生方の時間的な制約も出てくると思いますし、努力も大変なものがあると思います。それを受け取る生徒さん側の気持ちというものもあると思います。そういった意味で非常にいい形で事前学習がされていると感じました。これが事前学習としてはおそらく理想的な形になると思います。

高階 ありがとうございました。

修学旅行をご支援なさっているツーリストの方は、事前の学習をどれくらいなさっているかはよく見えるのではないかと、だけど、相手はお客様だからもっとこういうことをやって欲しいと思っても、なかなか言えないと思う。でも、実際やってくれたら、生徒はかなり違うはずなのだが、学校にそういう共通認識が高まってくれば、その後の実際の修学旅行は実りあるものになると思います。そういう点で、例えば、25ページ下のほうに太字で「集団の2層化」とありますが、いい学校でも非常にやる気のある子どもとそうでない子どもが居て、2極分化が行われているのではないかと、そうすると、積極的な子どもはどんどんやるのだけれど、そうでない子どもはあまり乗ってこない。どうすればよいか、そういう点で後半の話に今後持っていきたいと思います。この辺で10分休憩にします。

先ほどお願いしておりました質問事項がありましたら、質問用紙にお書きになって、是非勤務先、お名前もお書きの上担当に出していただきたいと思います。よろしく願います。

後半は、子どもをどうやって伸ばしていくかという、実践的な中身に入っていきたいと思います。

<休憩>

高階 それでは、時間がまいりましたので、後半に入りたいと思います。

後半のテーマは、児童生徒が生き生きと活動する修学旅行のあり方というテーマで進めたいと思います。それで4人の方にまたお話をしていただきたいと思っていましたら、質問が2つ出てまいりまして、非常に特徴的な質問なので、そういう質問を踏まえながら、話をさせていただくことはどうかなと思ひまして、最初に質問を紹介させていただきたいと思います。でも、やはり質問されたご当人に登場していただいた方が良いでしょうと思いますので、近畿日本ツーリストの竹内さん、前のほうにお出でください。マイクを通して、どんなことを書かれたか、ご自分から説明して下さい。その次に、相模原の田中先生、次に続けて下さい。非常に対照的なものですから。よろしくお願いします。

それでは、竹内さん、よろしくお願いします。

竹内 近畿日本ツーリストの竹内と申します。私が書いた質問といひますのは、先生方が非常に忙しい忙しいといひながら、修学旅行の準備をなさっていることは間違いないと思うのですが、その中で、先生方は、本当はもうやりたくないなと思ひている先生が居るのではないかと、思うところがあるものですから、先生方の中でアンケート等があったら拝見し、本音をお聞きしたいという意味で書いてみました。私どもは先生方になかなか言えない部分ですので、旅行会社に見せなくとも、もしあればということで質問させていただきました。

高階 ありがとうございます。

それでは、田中先生お願いします。

田中 神奈川県相模原市立相原中学校の田中でございます。新横浜から関西方面への修学旅行をずっと続けてきております。そんな中で、ここで「のぞみ」を使う形になってきました。

そうすると、初日は、お昼前には向こうに着いてしまう。3日目については、午後4時くらいまでは活動できることになります。最終、帰ってくるのが午後6時7時になってしまいます。そうなった中で、時間が増えた分どうするのか、ということ現場ではここ2年間考えております。広い地域で、昔は京都奈良だったのですが、関西方面も大阪、兵庫、神戸ですよ、震災関係。それから和歌山まで今年は足を伸ばす形で、昨年下見に行きながら作り上げてきたのですが、体験場所も広がりますし、私たちの情報量も少ないわけですから、どこまでそこを押さえていくかということで、先ず1点目です。内容面でどの程度広げていくのかな、ということです。

それから、学校現場としては、2泊3日をただ体験をやらせているのではなく、レベルというか、学年全体の行動、学級、それから生活班、クラス6班、6人位でしょうか、後、

考えようによっては、目的別の体験を選んでいく上の、クラスをこわした形で班を作り、やっていきますので、目的意識とかは出来ていくのではないかと考えています。

今年の修学旅行でいいのかなと思ったのは、3日目が最後京都駅に午後3時頃集めなければならぬので、2百何人の学年なのですが、タクシーを使いました。タクシーなら安心して子どもたちを集められる。ということだったのかもしれませんが、それで済ましていいのかなという思いで見えています。それは、タクシーなら運転手さんとの交流もあるだろうし、京都をしっかり押さえる部分としてはいいかなと思うのですが、

来年に向けて考えていこうと思っています。そのようなことで質問しました。

高階 ありがとうございました

フロアの方から、特徴的な2つのご意見をいただいたのですが、ご自分で携わっていますから生々しいですね。後でフロアの方に様々なご意見を頂戴したいと思いはじめました。よろしくお願ひしたいと思います。

そこで、お二人の意見はちょっと特徴的なのですよ。何かというと、近畿日本ツーリストの竹内さんは、先生方は教科とかの指導が忙しくて、修学旅行が大事だ大事だといわれていますけれど、準備だとかそういうものが面倒くさくて、本当はやりたがっていないのではないか、今の学校はそういう点で時間が無いのではないか、というご意見なのですね。

まず、直接聞きますが、データはありますか、ありませんか。

田中さんは逆にですね、最近のぞみを使い始めたので、修学旅行先の時間が沢山あって、余りはじめている、という逆の意見ですね。片一方は準備の時間が無いという、片一方は修学旅行先での時間がかえって多くなる。その時間活用をどうしたらいいか、同じ時間なのですが全く逆の方の対照的なご意見なのです。そこで、増田先生の学校では、かなり事前の準備、学年の積み上げ、そういうことをやられているのです。それは、何でそんなに時間をかけても、韓国旅行に打ち込まないといけないのか、何を目指しているのか、子どもを育てるという基本のところがあるからではないかと思うわけですよ。そういうことでやはり時間をかけたい、ということでお話をいただきたい。

増田 先ほど、近畿日本ツーリストの竹内さんから質問がありましたが、多分、うちの職員の意識は、アンケートは取ったことはありませんが、正直言いまして大変だなあと考えている職員はいると思います。ですが、結局は子どもが間違いなく育ちますから、止めようという意見にはなりません。ただ、大変なことは事実です。

どういう面で子どもが育っているということですが、一つは、人に対する見方ですね。これが高まってきます。例えば、表面の顔とか形、それから風説や噂（うわさ）ではなくて、日常生活を抱えながら、本当のその人そのものを見る。これは、お互い、仲間同士の学校生活でも同じですので、こういう見方が育っていく。二つ目は、ものの見方がずいぶん大人になるのです。情報化でいろんな情報が入ってくるのですが、子どもはまだ、価値判断が育っていないのです。どうしても一面的な見方がよくある場面です。そうではなくて、向こうの方の思いを、非常に反日的な態度のお年よりもおられれば、日本と両方知って思いを語って下さる韓日協会の方もおみえになれば、同年代の仲間同士として共通するものもあるのです。そういう意味では、いろんな関わりながら、幅広いものの見方が

できるようになったということです。報道された部分がすべてでなく、違う視点で子どもたちは捉える目を知って育ったといえると思います。

それから、人との共生です。ともに生きるという意味です。そういった視点では、韓国研修はかけがえの無い体験学習の場になっていますから、大変ですけどうちの職員から止めようという言葉が出てこないのはそういうことだと思っております。

高階 それではもう一人、学校の立場から大橋先生お願いします。

大橋 こういうアンケートは取ってはおりません。大変さは分かっていますが、先ほど増田先生がおっしゃったように、やはり、行事が終わってみると、子どもが変容している姿に、疲れが吹っ飛んでいる。というのが、実際の姿かなあとと思います。

前任校では、1年生は長野県への移動教室、2年生は同じ長野県へのスキー移動教室、これは全員です。3年生は修学旅行、というステップを踏んでいますので、どの行事についても、内容は違いますけれども取り組み方は似たようなところがありますので、教員はそれに向かっていろんなプログラムを組んでいる。というのが現状です。

現任校では、1年生は臨海学園、これは希望者です。2年生は全員の移動教室、1・2年対象の部活動合宿、そして、2年生対象の希望者のスキー教室、そして3年生の修学旅行と。大変数が多いのですが、どの行事に対しても教員は一生懸命取り組んでいるのが現状です。全国的な調査は、そういう調査があるのかどうか分かりません。

高階 わたしからもお話しますが、修学旅行の目標というのは、相当前から変わらないのですが、最近、総合的な学習の時間が入ってきたことで、総合的な学習の時間と関連させた修学旅行が出てきています。

例えば、修学旅行に行く前に、京都を選ぶときに京都の何を見たいかをグループで相談するとか、見たいものの情報を様々な形で集めるとか、あるいは仲間で相談して役割分担をするとか、そういう事柄については、総合的な学習の時間でやれるということが大分出てきたのです。そうすると、修学旅行だけを考えるのではなくて、それ以前の、事前の学習活動の幅が非常に広がってきたのですね。だから、今の中学校は、ほとんどが修学旅行単独でやるのではなくて、総合的な学習の時間との関連の中で時間を生み出しながらやっていますから、過去に比べますとはるかにやりやすくなっているのです。しかも、終わった後、帰った後でも、自分たちがどんな体験をしたかということに、みんなの前で発表する。そのことで発表の仕方の学習、つまり、プレゼンテーションを学ぶ、そういう学習も組織されているのですね。

修学旅行を間にして、事前の学習、事後の学習ということの関連の中で、相対的に考えますから、修学旅行の良さとか生かし方というのは、以前よりはるかに考えやすくなってきた、ということはあると思うのですよ。それが将来的にどう変わるかということは、課題は残るかもしれませんが、そういうことが現在では相当広がってきているのは確かです。ということで、竹内さんよろしいですか、データはないということです。

田中先生の質問に移ります。

京都や奈良から、大阪・神戸・和歌山と体験を広げていったというような事で、修学旅

行先で時間の余裕が出てきた。そういうときにどうしたらよいか、これは、地元の杉本先生にこういうやり方があるよと、ヒントとかアイデアとか、お願い致します。

杉本 修学旅行で和歌山までお出でいただいているということで、私は和歌山人でございます。ありがとうございます。

関東から近畿に修学旅行で来られるときに、勿論、奈良・京都。それから最近といっては失礼ですが、兵庫県への地震に関わるようないろいろな安全教育、そういうことが拡がっています。大阪には、商業都市としてだけでなく、関係はあるかもしれませんが、町工場で世界一の技術を持っているところが沢山あります。町工場で人工衛星を飛ばそうじゃないか。「まいど1号」という人工衛星を飛ばそうじゃないかということに取り組んでおられる町工場がある。いろいろ探していただきますと、全国どこでもあるかも分かりませんが、特に東大阪市というところは、そういう工場をたくさん抱えたところでありますので、そこで話を聞くだけでも、随分やる気がわいてくるというか、こういう小さな町工場が世界一なのかというところもありますので、おっしゃっていただければ、私たちも捜す努力はいたします。和歌山にもたくさん体験学習をすることの出来る場所もあります。どうかご相談ください。全修協の東京本部を通じてもできますし、私たちの大阪事務局を呼び出していただいてもご協力させていただきます。よろしくお願いします。

高階 ありがとうございます。高橋さん、何か。

高橋 具体的なことは私も申し上げられないのですが、先ほどの時間的に余裕が出来るということで、一つの考え方としてはエリアを広げて、もう少し遠距離まで行っていただくという事、もう一つは、場所を変えずにもう少し内容を掘り下げて、もっと深いものにしていただくという、この二つの方法があると思います。具体的なものに関しては、今回のプログラムのパンフレットの裏にも環境学習旅行の素材ということで、こういった資料もございます。

おそらく全修協さんだけでなく、私ども旅行会社の営業担当の者も、先生方がどれくらいの時間でどういったことを学校としてお考えになっているのかというのを聞きした上で、素材をお持ちすることは十分可能だと思いますので、是非、旅行会社にご相談をいただければと思います。

高階 この件に関して、私も自分の体験からお話をしたらいいと思うのですが、私が国立教育研究所にいたときに、愛知の中学校の子どもたちが4人訪ねてきて、事前に手紙が来ておりまして、内容を読んでもみます。

現在の学校について、①現在の学校教育の問題は何ですか、また、その解決策はありますか。②社会・国の考える学校教育は何ですか。③シュタイナーの教育が日本ではあまり知られていなく、日本も外国に取り入れられてないのはなぜですか。④今後、学校はどう変わっていくべきだと思いますか。以上の点についてお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

こういう文面が中学校3年生から来ました。この学校は、この4人は教育について質問

したいということで、私のところに來たのです。ところが、他のチームのテーマを見るとすごいです。「超伝導とその実用化に向けて、新素材を作る未来」を調べたいとのことで、どこに行ったのでしょうかね、科学技術庁へ行ったのですかね。「ガンは医学で解明できるか」というテーマがあって、これはガンの専門医のところへ行ったのでしょうかね。「21世紀の報道に迫る」というテーマを掲げているところがあって、これは朝日新聞社か読売新聞社へ行ったのでしょうか。「身体にやさしい化粧品」というテーマもあります。これは資生堂かどこかへ行ったのでしょうかね。つまり、どこかを選ぶときに私たちは、普通の修学旅行で観光的なことを考える。あるいは神社仏閣とか伝統的なことを考える。でも、今の子どもたちは、もしかすれば未来に向けてこのことについて知りたい、今の世の中はどう変わっているのかということで、先のことについてもっと情報を知りたい好奇心を持っている。そういうことを満たすような地域に出かけて行って、そのことを知りたい。

相模原は修学旅行に行かなくたって東京でやれる。京都奈良や和歌山へ出かけて行ってその地域の特別なことを学べることをやってもいいのでは。

25 ページ、「集団の2層化」というのがありますが、これはいったいなんだろう、修学旅行にもこういうのが出てくるのかな。今学校は「ふたこぶらぐだ」といって非常にやる子供たちと、自分で何を目標そうとしているのか、やらないというかに二極分化されている。子供たちをどのように変えていったか、増田先生にお伺いしたいと思います。

増田 集団の2層化とは、我々指導者の仕事ではないか。本当に一生懸命やっている子もいます。一方でそうでない子もいます。観光研修は、集団で外国へ行くわけですから、一人が行かないと大変なことになる。その事を自覚させながら日常の事前の活動からその子を育てることではないかなと思っています。一生懸命やっている子供たちの思いをきちんと伝えることで気づきがありますので、思いやりの気持ちを共有して指導しています。

高階 杉本さんは感じていることがありますか。

杉本 体験学習ですが、和歌山県の体験学習率が他県と比べて悪い。これは自分の県の恥をさらすようで言いたくないのですが実施率で50%前後、どうしてこんなに悪いのか、校長に聞くと、体験学習ができる学校が羨ましい、私の学校は学校を出発して安全に着けば、事故なく事件も怪我も何もなく戻ってくることが、最大の保護者への土産でもあるし、学校への土産でもある。ですから、非常に進んだ、一生忘れられないというような感動を覚える修学旅行が出来ている学校と、今申し上げましたいろんな事情で、簡単な体験学習すら出来ない学校もある。

高階 東京などでも体験したくてもできないような交流体験とはありますか

大橋 現実的に生徒指導上の問題で集団で見学活動しておいたほうが無難、というような状況になっている学校もあると思う。日常の教育活動の状況によって、体験活動ができるのかできないのか、一つの目安ではないか。体験をやることによって、生徒が変わる変容するという部分もあるが、そこへ踏み込めない状況もあるのではないかと考えている。

体験活動を修学旅行の中に取り入れている学校は多くなってきている。

高階 高橋さん、体験のケースはいかがでしょう

高橋 増田先生にお伺いしたいのですが、事前学習の中で2層化が起こると、熱心な生徒とそうでない生徒と、私の体験では行く時はやる気がなさそうでも実際に現地へ行ってみたら、向こうで刺激を受けていい体験をしてきたというようなケースがあると思います、増田先生いかがでしょうか。

増田 ある1名の生徒が違反物をもってきましたが、交流の場面とか話を聞く姿勢とか頑張る子には声を掛けました。現地で困ることはなかったし、海外研修は意味があったなと思います。

高階 文部科学省倉見課長補佐が体験について話をしましたが、修学旅行は大きな体験の場でありどのような体験をするかが大事である。将来的に考えて修学旅行のあり方、もっといい方向に持っていかなければならないという趣旨だったと思います。修学旅行における体験、その中で子供達が生き生きと活動できること、プラスどんな力を身につけるか非常に大事な問題だと思います。そういう事をどうすれば可能になるのか、体験重視の修学旅行についてフロアの方からご意見ございませんか。

会場からの質問

修学旅行を実施する段階で、校長先生の仕事は責任があり大変だと思いますが、学年主任を中心にしながら担当が動かしていきますが、修学旅行は最終段階の仕上げになります。1年生・2年生・3年生と持ち上げていくのですが、忙しくて大変なのではないかという部分と関わりますが、総合の部分で事前・事後の学習ができます。但し特活の部分で組織を作ります。修学旅行実行委員会、班長会、室長会、保健等、それらが放課後に関わってくるため、部活とかの関係で時間の配分などが学年レベルでは大変であるが、それは子ども達を育てていく、自分たちで修学旅行をやってく、校外学習をやっていくんだぞということで、遠足・自然体験・修学旅行と持っていくわけですので、生徒指導上厳しい部分もありますが、自分たち子ども達が作っていくのだということの中に、子ども達を吸収していく努力を現場ではしている。大変だけでも仲間で作っていくのだということがあれば、自分たちも安心して子ども達を連れていけるのではないのでしょうか。

やはり体験は大事だと思います。相模原では班別行動をしていますが、そこには地域の方々との関わりがそこに出てきますが、それは大事にしていきたいなと思います。

高階 ありがとうございました。

いま、大事な指摘がありました。1年生からの積み上げみたいなものが学校の中に組織化されていて、1年はこのレベルで活動がある。2年生はこのレベル。3年生は最終的に学校生活のまとめとして修学旅行がある。それは3年生になって慌ててやっても実らない。学校体制がきちんとしている事が必要で、そのことの自覚が先生方にあれば、皆で頑張っ

てやっていくんだよということだと思います。

修学旅行の中味も含めて子供を生き生きとさせるやり方があるのではないかと、前に比べて、子ども達が自分から考えて計画し参加したり、皆で共同しながらやりはじめてきた。そういうスタイルに変わってきたということに、大きな意味があると思います。体験が苦手だと言ってるうちはまだ本当の修学旅行は生まれない。体験学習は生まれない。でも子どもは自分たちで組織からできるような体験活動を考えてそこに参加させる。そうすると子ども達は自分でやり遂げるような自己成長というものが生まれるのではないかという気がします。

そういうお手伝いをしてきた杉本さんいかがでしょうか。

杉本 自分たちが修学旅行を創り上げていく、あるいは学校体制がきちんできている。そういう事と関連していますが、ある学校ではテーマを自分探し夢探しというテーマを設けて、1年生の時から進路指導、進路選択と修学旅行をからませているので、打ち合わせの段階、訪問先への依頼などを生徒にさせている。その中でお願いをする電話のかけ方、言葉使い等どうしたらいいのか、まったく接したことが無い大人たちと接することになるわけですから、友達と話をしているようなわけにはいきません。そういう中からいろんなものを積み上げていって目的意識の高い修学旅行が出来ていますという例も近畿地方にはあります。

高階 もう一枚質問が来ています。

横浜市では修学旅行に飛行機の利用が可となりました。中学校も海外に行くという学校が増えてくると思うんです。海外に行って中学生が体験学習するときのノウハウが知りたいと思うところがあると思います。こういう事をやればいいのかこういうところからスタートしたと言うような例はありませんか。韓国のいい例を聞きましたので、その他の地域でなにかありませんか。

高橋 飛行機の利用が解禁になって、海外のチャンスが増えてきます。おそらく公立の学校さんですと時間的な制約や金銭的な制約が出てくると思います。それを考えると、行けるエリアが限られてくる。私立の行かれているような遠距離を飛行機で飛ぶようなオセアニアやカナダは難しいと思います。場所としては、中国、韓国、台湾など、場合によってはグアム、サイパンなどが選択の範囲になると思います。そういう意味では、韓国、中国は歴史的にも日本との繋がりも深いものがありますし、いま、両国間であるいは三国間で抱えている問題など解決しなければならない問題など時事的な問題もありますし、生徒の関心を引き寄せてそちらのほうへ気持ちを持っていくような作業が必要なのだと思います。国内と違って、事前の手続き的なものや、コストに関してもそうですが、ちょっと余計にお金がかかってしまうこともあります。学校の先生方のコンセンサスや、保護者の皆さんのコンセンサスも当然必要になりますので、きちっとした旅行の目的や意義を説明できる、ご理解いただけるものを、先生方のほうでお作りになることが必要だと思います。

高階 ありがとうございました。

そうすることで、私が感じたのは、今日は学校の先生方と旅行業者の方が一緒に話されていて、「学校としてこういうのがほしい」と言う目的地に関する情報、今日はたくさんのパンフレットが並んでいました。国内はわかる。でも横浜のように海外に行けることになったところは、海外のノウハウは知らないと言うようなことがあるのではないかと思います。これは、協会でも組織だって情報提供をやる。いよいよ海外に手を広げてやる必要があるのではないかと思います。その中で、増田先生のやられたような韓国ではこういう事があるというような情報が学校に伝わっていくことがいいと思うのです。

それでは時間も少なくなってきましたので御一人3分程度で、これからの修学旅行のあり方、そのことを子どもの生き方を含めて、こういうことで考えるべきであるというような未来に向けた積極的なご意見をお願いします。

増田先生、高橋さん、杉本さん、最期の大橋先生の順でお願いします。

増田 言葉が適切かどうかわかりませんが、執行の方法として演繹的手法がいいのではないかと思います。まず、何のためにいくかという目的ありきです。その原点は学校の教育目標であり、学校課題だと思うんですね。今、どんな力を子どもたちにつけていくことが必要なのかはっきりすれば、おのずと活動が考えられる。と思いますので、ぜひ演繹的思考で考えていきたいと思います。よく言われるのが、活動サイクルですね。PDSAですね。この通りだなと思います。今の発想で考えると、どういう力を見つけさせていきたいか発見し、活動にかかわれば、評価の基準がはっきりします。自分たちでやってみてその観点から評価ができますから次のアクションを考え出せると。すでにうちの学校では来年度の新3年生の修学旅行をどうしようかと言うことが今から出ています。こういうことを大事にしていくことがいいと思います。

高階 ありがとうございます。次に高橋さんお願いします。

高橋 今先生方からもお話しあったように、旅行に行く目的・学校課題というものを、学校さんの方で明確にさせていただいて、それを私どもサポートしていく旅行会社にお伝えしていただくことが非常に大切なことなのではないかと思います。それに即して、私どものほうで学校さんの目的にあった旅行素材の提供あるいは、事前の学習に係る部分の素材の提供は考えられると思います。現地・現場の情報を一番早く一番細かく入手できるのは、私どもだと思いますので、そういったものを十分活用させていただいて、より学校さんの目的にあった、旅行の実現に精一杯、お手伝いをさせて頂きたいと思います。特に教育旅行に関しましては、修学旅行を含めまして特殊な技能を要する仕事だと考えています。旅行に関する情熱を持ってあたって、先生方と価値観を分け合うということが必要となりますので、会社としましてもそういった人材を育て、精一杯お手伝いをさせて頂きたいと思っています。よろしくお願いします。

高階 それでは杉本さんお願いします。

杉本 11月17日に、今日お見えになっておりますが、近畿地区公立中学校修学旅行委

員会では、滋賀県の学校と京都府の学校が1校ずつ修学旅行の研究発表を致します。そのうちの1校ですが、その要録にある生徒の感想文をご紹介します。これは、沖縄に修学旅行に行った学校です。

『私の目に輝いて写ったのは、沖縄の人たちの暖かさだけではありませんでした。ずーと少しとぼします…。潮の満引きによって、生まれた亜熱帯地方独特のマングローブ林はとても神秘的でした。マングローブ林の景色と共に私の心に刻み込まれた言葉があります。沖縄独特のすばらしい自然に感動したように、地元に戻ったら身近にある自然や環境の素晴らしさに気づき、もっともっと地元を好きになってください。案内して下さったガイドさんの言葉です。私はこの修学旅行でお金では買えない大切な宝物を見つけることができました。沖縄に行って肌、目、耳など自分の身体で感じた自然や戦争の爪あと、そしてたくさんの方との出会い、沖縄の全てを案内して下さったガイドさん、戦争のことを話して下さった人々、伊江島に学校間交流で行っていますので、伊江中学校の皆さん、島のおじい、おばあ、この修学旅行をとおして人と出会うことの大切さ、楽しさを学ぶことができました。私は沖縄での平和学習や体験で学んだことを、たくさんの方に伝えていきたいです。また、これらの学習や体験を生かして、この高島で（滋賀県の高島市というところですが）自然や環境を見つめなおし、平和を求めてどのように生きていくのか、とやることをしっかり考えていきたいと思っています。自然と共に生きること、人と共に生きることが平和の源であることを信じながら…。』

で、この後に、指導された先生の思いが1ページに渡ってあるのですが、これを読ませてもらおうと学校の覚悟というんですか、それが読み取れるような気がします。学校は、これからは、私も自分が校長を何年もしながらこういう修学旅行をできなかったの、あまり大きなことを言えるわけではありませんが、生徒にこういう風に感じてもらえるような修学旅行がいいな、という風に思っています。

高階 ありがとうございます。最期に、大橋先生お願いします。

大橋 「体験は、知識を知恵に変える。」というふうに言われています。ですから、ある程度の知識がないと知恵になっていかないわけですね。そういった意味では、日頃の教科の学習であるとか、あるいは修学旅行に向けた事前の学習であるとか、こういったものの重要性が一層高まってくると思います。ですから、そのことをしっかり学校は踏まえておかなければいけないだろうと思います。また、これからの修学旅行は、修学旅行における学習内容と、旅行先が多様化してくるだろうと思っています。海外を含めてのことですが、そうなれば旅行先の情報を如何に把握するのか。ということが、一つの課題になってくるのではないかと思います。

それから、修学旅行というものを学校の教育課程の中にどう位置づけるのか。これは非常に重要なことだと思います。例えば、教科横断的な学習として位置づけるのか。総合的な学習の時間の一貫として位置づけるのか。はっきりとした位置づけを学校は持つべきだろうと思います。その中で、修学旅行の目的は何なのか。ということが絞り込まれてきます。その目的を達成するために体験活動がいいのか、調査活動がいいのか、或いはインタビュー活動がいいのか、様々な方法が出て来るのではないかと考えております。何よりも

生徒に学ぶ目的を持たせる。学習する内容がきちっと自分自身で把握できている。課題の把握と言いますか。そして、学習の仕方が分かる。これは修学旅行中における体験の内容であるとか、インタビューであるとか、或いは学習内容等の学習の仕方が分かるということが非常に重要でないかと思います。また、学習や体験活動のおもしろさが体感できるということが、非常に大きな要素になってくると思います。そのために、人間関係とか、社会性であるとか或いは大人同士や生徒同士の協働と言いますか、そういったものが必要になってくるのではないかと思います。

最期に、学習や体験或いは活動に対しての満足感、充足感であるとか、成就感であるといったものが味わえなければ、次の学習への意欲に繋がっていかないのではないかと思います。即ち、修学旅行における教育の価値をどう高めるのか、という視点でもう一度見直していかなければならないことではないかと感じます。

高階 ありがとうございます。大橋先生から素晴らしいまとめをして頂いたと思いますが、私のほうでもコーディネーターの役割として四つほどまとめて、簡単にお話しします。

一つは、新しい教育の方向の中でどんな人間作りが必要か、人間力形成の問題が出てまいります。その方向で修学旅行を見直す必要があるのではないか。これが第一点です。

第二点は、体験重視が修学旅行で強く言われています。どんな体験をすることがいいことなのか。自ら学ぶということでそれぞれ課題を持って体験活動に取り組む、そういうことが重視されるような修学旅行が考えられるのではないか。

三つめは、修学旅行は単に3年目の活動ではなく、1年生、2年生の積上げがあったり、PDCA というようなマネジメントにのっかって、きちっと積み上げられていく活動であって、それが最後の集大成になるのだという、学校組織をあげての修学旅行のあり方が今後求められるのではないか。

四つめは、いよいよ中学生も国際化の時代に入る。外国での修学旅行というものも今日の話題として、出てまいりました。また新しい知見が中学生から広がっていく。そうすると国際化、情報化がますます広がっていく中で、修学旅行をそういう観点で見つめ直していこう。そういう拡がりがあった。今日の話は、私なりに四つにまとめさせていただきました。

それでは、時間が少し過ぎたようですので、この辺で終わりたいと思いますが、4人のシンポジストの方に盛大なる拍手をお願いしたいと思います。（盛大な拍手）

どうもありがとうございます。それでは終わりにしたいと思います。

総合司会（池田） 高階先生そしてシンポジストの皆様、大変有意義なご発言をいただきまして誠にありがとうございました。お陰様で大変充実した大会ができて、厚く御礼を申し上げます。修学旅行不要論は、何時の時代もありましたが皆様のお話をお聞きしまして、絶対無くしてはならないものではないかと感じております。

再度拍手をお願いします。どうもありがとうございました。（拍手）

全国修学旅行研究大会の歩み

財団法人 全国修学旅行研究協会

回	期日・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第1回	昭和53年 7月6日 大阪市教育青年センター	主題 「今後の修学旅行・自然教室・野外活動を考える」 発表 山城 真 西宮市塩瀬中教諭 「日常的教育活動を生かした本校の校外学習」 講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育の今日的課題と修学旅行・自然教室」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校修学旅行連合委員会
第2回	昭和60年 10月22日 大宮市民会館	主題 「自己教育力を育てる修学旅行」 発表 瀧田 潔 宇都宮市立横田中学校教諭 「修学旅行を通じての自己啓発」 講演 加藤 隆勝 筑波大学教授 「現代青少年の心理と集団行動」 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「自己教育力を育てる修学旅行」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 大宮市教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校修学旅行連合委員会
第3回	昭和61年 11月14日 兵庫県私学会館	主題 「集団宿泊指導の積み重ねによる修学旅行」 発表 坂東鐵二 西宮市甲陵中教諭 「1年生からの校外学習の積み重ねによる修学旅行」 雨宮 章 長岡京市四中教諭 「生徒の自主的・実践的態度を育てる修学旅行・野外活動」 講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「特別活動の充実と今後の修学旅行のあり方」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校修学旅行連合委員会
第4回	昭和62年 11月20日 名古屋市立教育会館	主題 「新しい修学旅行の実践をめぐって」 発表 後藤 幾郎 名古屋市立平針中学校校長 「思い出に残る修学旅行の実践を求めて」 伊藤 一美 各務原市立緑陽中学校教諭 「班行動を核にした東京連泊修学旅行」 土屋 豊 半田市立亀崎中学校教諭 「生徒が作る修学旅行」 講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育改善の方向と今後の修学旅行のあり方」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校修学旅行連合委員会

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第5回	昭和63年 11月25日 茨城県立 県民文化センター	主題 「みんなが創る修学旅行」 発表 宮本千代子 土浦市立第六中学校教諭 「生徒自身の生徒の手による修学旅行」 川上 徹 日立市立豊浦中学校教諭 「お互いを高めあうグループ別見学学習」 須藤 数彦 下館市立下館中学校教諭 「生徒と教師が共に作り、触れ感じる修学旅行」 講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「学習指導要領改訂の方向について」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 大宮市教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第6回	平成元年 12月1日 大阪府教育会館	主題 「特色のある修学旅行生徒の自主性を生かして」 発表 荻野 南子 西宮市深津中学校教諭 「生徒たちの創意工夫を生かした修学旅行。リーダーの育成と班別自由行動」 林 一幸 富田林市三中学校教諭 「集団作りの中の修学旅行。自主性の創造をめざして」 講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「個性を生かす教育と修学旅行」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会 大阪府教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第7回	平成2年 11月28日 ホリデーイン豊橋 ホリデーホール	主題 「連帯感の育成を図る特色ある修学旅行」 発表 鎌田 孝一 豊橋市立青陵中学校教諭 「集団意識を高める手作りの修学旅行」 松崎 一三 名張市立南中学校校長 「特色ある修学旅行の実施を求めて」 土屋 豊 半田市立亀崎中学校教諭 「生徒が作る修学旅行」 講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育改善の方向と今後の修学旅行のあり方」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 豊橋市教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第8回	平成3年 11月28日 千葉県佐倉市 志津コミュニケーションセンター	主題 「集団の中で自己を求めて協力しあう修学旅行をもとめて」 発表 斉藤 正行 市原市立 国分寺台西中学校教諭 「リーダー養成を中心にすえた修学旅行」 山田 守人 柏市立第五中学校教諭 「班別テーマを持った修学旅行を作る」 講演 渡部 邦雄 文部省初等中等教育局教科調査官 「集団の中に自己を生かす修学旅行」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 佐倉市教育委員会 千葉県小中学校長会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第9回	平成4年 11月27日 神戸市総合教育センター	主題 「視野を広げ、心豊かな人間性を育成する修学旅行」 発表 脇坂健一郎 美原西中学校教諭 「よく食べ、よく学び、よく遊ぼう」 平位 隆明 姫路市立東光中学校教諭 「心の豊かさを求める修学旅行」 講演 鹿嶋研之助 文部省初等中等教育局教科調査官 「特別活動における修学旅行の意義」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 兵庫県教育委員会 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会 神戸市教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第10回	平成5年 11月26日 名古屋市教育センター	主題 「自主的活動と体験を重視した修学旅行」 発表 長谷川濃里 一宮市立南部中学校教諭 「自主的に活動できる生徒を目指して」 —東京班別自主行動ができるまで— 松田 孝弘 関市立緑が丘中学校校長 「買い物ツアーからの脱却を」 —生徒の欠損体験を補う校外学習— 土屋 豊 半田市立亀崎中学校教諭 「生徒が作る修学旅行」 講演 渡部 邦雄 文部省初等中等教育局教科調査官 「修学旅行と体験学習」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第11回	平成6年 11月28日 宇都宮市 プラザいくろかみ	主題 「自主的に活動し自ら学ぶ修学旅行」 発表 田上 富男 市見町立市見中学校教諭 「3年間を見通し自ら学び取る力の育成を 目指す修学旅行」 —事前・事中/事後の一貫した指導を とおして— 吉田 真隆 宇都宮市立豊郷中学校教諭 「研究テーマの設定を中心に生徒自らが 計画した修学旅行の実践」 講演 大槻 達也 文部省初等中等教育局中学校課課長 補佐兼環境教育専門官 「修学旅行における生徒の自主性」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 佐倉市教育委員会 千葉県小中学校長会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第12回	平成7年 11月28日 大阪府教育会館	主題 「体験を重視し、自ら学ぶ意欲を高め、 心に残る修学旅行を求めて」 発表 中山 宏、伝刀永一 河内長野市立長野中教諭 「生徒の主体性を重んじた修学旅行の 創造」 江口 直宏(川西市東谷中教諭) 「修学旅行を通して自治・学習・友情を 高める」 講演 鹿嶋研之助 文部省初等中等教育局教科調査官 「修学旅行における体験学習」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会 大阪市教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第13回	平成8年 12月4日 名古屋市 教育センター	主題 「主体性を伸ばし、行動力を高める修学旅行」 発表 井辰 幸治 名古屋市立城山中学校教諭 「伝統工芸学習を取り入れた修学旅行」 －東京班別自主行動ができるまで－ 豊田真理子 津市立西橋内中学校教諭 「自ら考え行動する修学旅行をめざして」 －生徒の欠損体験を補う校外学習－ 土屋 豊 半田市立亀崎中学校教諭 「生徒が作る修学旅行」 講演 成田 國英 東京家政学院大学教授 「教育の今日的課題 －修学旅行への期待－」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第14回	平成9年 11月28日 浦和市民会館	主題 「主体性を伸ばし、行動力を高める修学旅行」 発表 田村 俊明 鷺宮市立鷺宮中学校校長 「生徒の知恵と発想を大事にし、主体的に 生きる力を育む修学旅行」 金子 桂一 鴻巣市立西中学校教諭 「自主的活動を目指した修学旅行」 講演 森嶋 昭伸 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育の転換と修学旅行への期待」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 浦和市教育委員会 埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、 群馬県各中学校長会 全日本中学校長会 協賛 埼玉県連合教育研究会特別活動部会 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第15回	平成10年 11月20日 西宮市 フレンテホール	主題 「体験を重視し、生きる力を育成する 修学旅行」 発表 寺田孝志 (堺市浜寺南中教諭) 「生徒の自主性を生かす修学旅行」 －実行委員会活動を中心に－ 鶴山実紀子 (西宮市山口中教諭) 「ウォークラリーから始めた修学旅行 班別行動の試み」 講演 成田 國英 東京家政学院大学教授 「教育課程改訂と修学旅行」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 兵庫県教育委員会 大阪府教育委員会 和歌山県教育委員会 奈良県教育委員会 京都府教育委員会 滋賀県教育委員会 西宮市教育委員会 全日本中学校長会 協賛 近畿地区公立中学校修学旅行委員会
第16回	平成11年 11月19日 岡崎市 せきれいホール	主題 「体験を重視し、生きる力を培う 修学旅行」 発表 清水 憲雄 岐阜市陽南中学校教諭 久保田尚志 岐阜市陽南中学校教諭 「体験活動を通して、学級の目指す姿を 見つめる旅」 三和 道徹 豊橋市立東陵中学校教諭 「生きる力を育てる修学旅行」 講演 森嶋 昭伸 文部省初等中等教育局教科調査官 「生きる力とこれからの修学旅行」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会 岡崎市教育委員会 愛知県小中学校長会 全日本中学校長会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第17回	平成12年 11月17日 群馬県 生涯学習センター	主題 「生きる力を育てる修学旅行」 発表 高橋隆雄 新治村立新治中学校教諭 「自主的に取り組む班別行動をめざした修学旅行」 壇田 榮一 田中 充弘 長野原町立西中学校教諭 「自ら学び、自ら考え、生き生きと活動する修学旅行」 講演 森嶋 昭伸 文部省初等中等教育局教科調査官 「これからの学校教育と修学旅行」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 前橋市教育委員会 埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、 群馬県各中学校長会 全日本中学校長会 群馬県中学校教育研究会特別活動部会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会
第18回	平成13年 11月22日 大阪府 たかつガーデン	主題 「体験的学習を通して生きる力を育成する修学旅行」 発表 中村勝成 田中 繁 松原市立松原第二中学校教諭 「総合的な学習にリンクさせた修学旅行」 岡田みどり 伊丹市立東中学校教諭 「自立をめざす三年間をみすえた学校行事づくり」 講演 森嶋 昭伸 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育の転換と修学旅行」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会 後援 文部科学省 全日本中学校長会 都道府県教育長協議会 大阪府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 和歌山県教育委員会 京都府教育委員会 協賛 近畿地区公立中学校修学旅行委員会
第19回	平成14年 11月22日 名古屋 ルプラ王山	主題 「体験を重視し、生きる力を培う修学旅行」 発表 今村 新次 板倉 徳子 四日市市立西陵中学校教諭 「生徒が主体的に取り組む修学旅行」 横田 里志 稲沢市立明治中学校教諭 「自ら考え ともに学ぶ修学旅行」 －総合的な学習の時間『ともに生きる の中に位置付けて－ 三和 道徹 豊橋市立東陵中学校教諭 「生きる力を育てる修学旅行」 講演 宮川 八岐 文部省初等中等教育局視学官 「新しい学校づくりと修学旅行」	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会 後援 文部科学省 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会 岡崎市教育委員会 愛知県小中学校長会 全日本中学校長会 協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第20回	平成 15 年 10 月 31 日 日本青年館	主題 「みんなで創ろう 21 世紀の修学旅行」 — 旅の原点から新しい修学旅行を考える — 提案 山本 精五 (財) 全修協 「学習者主体の修学旅行」 発表 栗原 勝義 さいたま市立 三室中学校教諭 パネルディスカッション 「人間にとって『旅』とは何か」 コーディネーター 石森 秀三 国立民族学博物館民族社会研究 部長・教授 パネリスト 川邊 重彦 東京都武蔵野市教育長 小野 具彦 全日本中学校長会長 (東京都中野区立中央中学校校長) 天野隆太郎 (株) JAL セールス 東日本支社 顧客販売部 グループ長 柴田 憲信 ガク・アソシエイツ 海外旅行総合研究所主任研究員	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 後援 文部科学省 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 東海三県中学校修学旅行委員会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会 協賛 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト株式会社 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞社 日本教育新聞社
第21回	平成 16 年 11 月 20 日 日本科学未来館	主題 「みんなで創ろう 21 世紀の修学旅行」 — 修学旅行における自己発見 — 全修協提案 新しい数学旅行の方向性 (学びを中核とした修学旅行実践の変化) 提案者 柳川達郎 (財) 全修協 理事 1. 実践発表 (1) 修学旅行実施事例 石井 基一 氏 (文化女子大学附属杉並中学・高等学校 中学部長) (2) 受入側の実践発表 金森 英樹 氏 (株式会社オハヨーサン 代表取締役社長) 2. シンポジウム 「修学旅行における自己発見」 コーディネーター 亀井 浩明 氏 (帝京大学 名誉教授) パネリスト 新山 雄次 氏 (文部科学省初等中等局児童生徒課 課長補佐) 野原 明 氏 (文化女子大学附属杉並中学・高等学校 校長) 宮地 信良 氏 (有限会社自然計画 代表取締役) 吉田 新 氏 (近畿日本ツーリスト株式会社 立川支店課長)	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 後援 文部科学省 東京都教育委員会 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 東海三県中学校修学旅行委員会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会 協賛 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト株式会社 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞社 日本教育新聞社

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第22回	平成 17 年 11 月 12 日 (土) 日本科学未来館	主題 「修学旅行における『学び』の創造」 ～学びを中核とした修学旅行の創造～ 全修協提案 「修学旅行の危機管理について」 提案者 久保行正 (財) 全修協理事 1. 実践発表 (1) 修学旅行実施事例 高山利三郎氏 千葉県我孫子市立湖北台中学校校長 (2) 受入側の実践発表 岸本 登 氏 大津市「びわ湖畔八景館」代表取締役 2. シンポジウム 「学びを中核とした修学旅行の創造」 コーディネーター 新井郁男氏 (放送大学教授・上越教育大学名誉教授 埼玉学習センター所長) パネリスト 吉田 章 氏 (筑波大学大学院教授) 後藤 太 氏 (全日空東京支店法人販売部文化交流担当 部長) 高山利三郎氏 (千葉県我孫子市立湖北台中学校校長) 石塚浩哉氏 (近畿日本ツーリスト㈱第一教育支店 次長)	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 後援 文部科学省 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 東京都教育庁 協賛 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト株式会社 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育出版
第23回	平成 18 年 11 月 11 日 (土) 日本科学未来館	主題「修学旅行における『学び』の創造」 －修学旅行における修学旅行の果たす役割－ 挨拶：文部科学省初等中等教育局児童生徒課 課長補佐 倉見昇一氏 東京都中学校長会会長 草野一紀氏 1. 全修協報告 「海外修学旅行の動向」 報告者 吉野憲二 (財) 全修協部長 2. 全修協提案 「体験学習の成果と課題」 報告者 久保行正 (財) 全修協理事 3. 実践発表 「修学旅行における海外交流活動」 山下俊郎氏 岐阜大学教育学部附属中学校 教諭 4. シンポジウム 「学校教育における修学旅行の果たす役割」 コーディネーター 高階玲治氏 教育創造センター所長 シンポジスト 大橋久芳氏 忍岡中学校長、前全日本中学 校長会長 山下俊郎氏 岐阜大学教育学部附属中学校 教諭 高橋正洋氏 近畿日本ツーリスト第3教育 次長 杉本敏和氏 全修協大阪事務局長	主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 後援 文部科学省 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 東京都教育庁 都市農山漁村交流活性化機構 協賛 近畿日本ツーリスト株式会社

＊第 19 回大会までは三地区持ち回りで開催。第 20 回大会から東京での開催となる。

**第23回全国修学旅行研究大会
報告書**

平成18年11月11日

発行 財団法人 全国修学旅行研究協会
[事務局] 〒102-0074 東京都千代田区九段南2-6-8
TEL 03-5275-6651 FAX 03-5275-6653
E-mail shuryo@h2.dion.ne.jp
URL shugakuryoko.com